

五井蘭洲『茗話』（中之島本）翻刻

〔凡例〕

- 一、底本は大阪府立中之島図書館所蔵本を用いた。
- 一、清濁・仮名遣いは底本のままとする。
- 一、句読点、カギ括弧を付し、改行を改めた。
- 一、変体仮名・異体字などは通行の字体とした。
- 一、「ㄱ」「ㄴ」「江」などはそれぞれ「より」「こと」「へ」などに改めた。
- 一、底本の誤字は改めず、「ママ」「〔衍字〕」などと表記した。誤りが明らかな場合は「」内に正したものを表記した。

一、頭書は《》で括って本文に適宜挿入した。

一、細書・割書は〈〉で括って表記した。

一、難読箇所は字数を推定して□で表記した。

一、巻ごとに章段の通し番号を付け、冒頭に「▼上一（ㄱ下二〇〇）」と表記した。なお、底本は改行によって章段を分けているが、段落冒頭の字が下がっていないため、場合によっては改行位置が分かりづらい。そこで、○印を付して章段を分ける大阪大学附属図書館所蔵『茗話』（三巻本）を参照した。

▼上―

世間の人の、諫をふせき非をかさり人を千里の外にふせく遁のかれことはに、「其事をとくとしらすして、おかめより評議す。其内へ入て見れば、又一路の方法ありて、思ひの外にすてられぬ事あり」といふ也。是、尤なるやうにて、調法の云やう也。

こゝに人ありて、しれる人のばくちにふけるをきひしくいさめけるに、其人、しりそきていふ、「はくちの場へ一度ものそかすして、あのことくにいさめらる。入て見れば、はくち中間にも一通り義理法度ありて、面白き事有。それをしらすして、我きらひなるにまかせて人をいましむるは無理也」といふ。其内へいらても、そのことは是非邪正は明らかなる事なり。「それも一理あらん」といふのみなるは不学の徒也。学問のかたしけなさは、誣しゆるに、其道にあらざる以てしかたければ也。

秦皇、漢武より已来、代々の帝王、諸くのよくを逞たくましくしつくして、「この上は此富貴をなかくたもちたき」といふ。小人のよく心より道士の道を信し、長生不死の仙をもとむ。諫むる人あれば、其君の心に必おもはん、仙術をすこしもかてんせすして、唯かきやふりにそしるせはき了簡なり。宇宙うちうの間、いかなることのあるもしれぬ事也。おのれか信せざるをもて、みなくいつはりといふ、豈理ならんや。是又広大の見といふへし。然れども、長生不死といふ事はなき事に決したり。老子の「長生久視きうし之道、又死而不し亡者寿」などいへるは、人為じんゐを以天年をかいせざるをいふ。羽化はねおひてんにのほる超昇の道ありとはいはず。古今、仙をまなふ人、一人として仙とならず、かへりてわさはひを得ること往々也。みな、方士ともか人をおろかにする也。その愚おろかにするをありかたかりて、「仙術もなきことならず。ならぬは修行のたらぬ也。信してよく修せは、なとか仙人とならざらん」といはし、此まよひ、いつとくへしも見えず。しるしもなき事をよもやたのみにたのみ、一生くらやみの内に錮こせられて終る、あさましからすや。

▼上二

杏はもろこしより来れるか。声を用て「あんす」といふ。しゐて名つけて「からも」といへり。なしも又しかる歟。声を用ひて「奈子なし」といふ。たちはなは田道間守かとり来れる故、「田道花」といへるか。菊は今の京になりて来れる歟。『万葉』のうた、草木の花見るに、たらぬ物を多くよめり。菊はなし。山にある一重の菊は外に和名のありけるなり。もろこしより菊きたりて、是にもきくの名をおほせり。

▼上三

夜宴に、客のかへらんとする時、灯に油を加へ、炉に炭を加ふ。人、これを評していふ、「礼也」。又、人いふ、「客をとゝむる術也」。又人いふ、「客は必かへる也。かくすれは、われをとゝむるやとてよろこぶ也。実は客をとゝむるにあらず。主人の心はいつれならんもしらす」。

第三の評のことくならは偽也。今時はかくのことくなるを「かしこきしかた」といふ。道にそむくこと甚し。第二の評は覇者はしやの心に似たり。第一の評、おたやかにして君子の心ならん。礼といふうちにしたしむ意もあり。文雅の心もあり。この礼、必しも礼家の條目にはあるましかれと、客をとゝむる実心を、意にあらはさずして、所作（あらはす）にあらず也。『礼記』には「灯はもとをあらはさず」と見えたり。同じ心也。

▼上四

裘を着用する事、日本にては穢なりとて古より用ぬ事と思へる人あり。誤れり。聖武帝神龜五年に、渤海より貂皮せうひ五百張まいを貢せり。是、裘につくる皮也。貂は、ある説に「てん」といふ獸也ともいふ。光孝帝の御時、参議已上は貂裘をきることを許し、参議已下は禁せらる。『源氏物語』に、末つむの女として、ふるきの裘をきられたるをしるす。然は、貂をきる事あたはぬ官人は外の裘を用ること、おしてしるへし。此頃の風俗は全く唐のありさまと見えたり。

▼上五

或人の戯語に、人あり、いふ、「読書学問はよきことなれと、一のきつあり。身持をよくせねはならぬと也。是、疵なり」といふ。是によりておもふに、今の世の学者は身持のよきをみれば、道学先生とてわらふ。この人ののそむ所也。又人あり、いふ、「読書学問はよきことなれとも、一の疵あり。高慢になるか疵也」。読書学問すれば、心ひろく成故、おのれをしりて謙遜に成へし。高慢になるは井の内の蛙の類也。又人のいふ、「読書学問はよきことなれと、一の疵あり。貧乏になる。是一の疵なり」と。読書学問すれば、人々の職業をつとむる事をしり、才を長し、知をます。貧にはならぬものなり。もし貧にならば、時としりて、是に安心してたのしむ心生ず。楽しむ境界にいたれば、貧も貧ならず。まつしくなりて読書学問なき人は、多くはいやしくいつはるの人となる。

▼上六

或人、雷をとふ。答ていふ、「是、陰陽のあらそふ也」。かたはらに儒者ありていふ、「天地の間、変怪はかるへからず。人、わつかの智にていかんそ其実をしらん。古人の説に、雷は戦なり。又雷神ありてつゝみを打也といふ。是実ならんもしらす。手にとりて見ざる事なれば、今尤らしく陰陽のわさといふも畢竟是に同じ。みな朱子きうりの弊也」といふ。予、こたへていふ、「もとより変怪はかるへからず。是をしらぬは我智のいまた至らぬ故也。故に聖人といへ共しらざる所有。今かりに日月の食の数術いまたしらざる世ならんに、人あり、其術をひとり伝はりて、「明年何月何日に日食又は月食あり。其食の様これく」といはんに、そこには定て、「何によりてしる」と問給はん。その人、其理をいはく、かならず腹を捧て、「日月のこと、汝凡夫いかんそはかりしる事やあらん」とわらひたまはん。是、その智いまた日月の食をしるに至らぬ故也。雷の説も是に准すへし。日食の説、古来同じ。月食の説は朱子といへ共それに智のいたらぬ故、暗虚あんきょの説を信せられたり。地影の説出てより古説みなはいす。明の謝在抗か説、よくそこに似たり。みな腐儒の見しきと云へし」。

ある人、天狗といふ事をとふ。予こたふ、「深山迷谷窮陰の地にたま／＼陽氣陽物いたれば、又けきはくし、山なり石とひ種々の変怪をなす。是を世の人、天狗の所為といふ也。たとへはこゝに火薬えんせう数百斤あらんに、わつか一点の火おつる時、三もんめの火薬のとふはさもあらんかし。数百斤の火薬、皆一度に激迫はねいたし迸出し、家をとほせ屏をくすし人畜をいとはす一時に靡ひしやくたぐ碎す」。此ことはりのかたはらに儒者ありていふ、「先儒、天狗の説をつくり、天地の間に一物ありて種々に変化するなれば、天狗といふ一物あらんもしるへしマヤへからず。此説おたやか也。陰陽の説は尤しくはあれと、これ朱子窮理のつゐへなり。しらぬはしらぬにしておくへし。いらぬ陰陽せんきなり」といふ。予こたふ、「本より天地の間一物ありて種々に変化す。その一物といふは陰陽にすぎず。其先儒の心には鼻たかく頭巾とんじんを着、はねありて立付をはきたる物をいふ也。されは社、一物か仏菩薩となり、羅漢明王となるなどいへり。是、偶人を作り、金箔をぬり、異形殊相なるものとひとつにせり。是、其智いたらぬより、かゝる異形の物もありとおもへり。およそ天地の間、みな怪異也。好事者のいふ怪異はなきものとしるへし」。

▼上七

『委巷叢談』に、「錢塘羅貫中者、南宋時人。編撰（一）小説數十種、而『水滸伝』叙（二）宋江等事姦盜脱騙機巧甚詳。然変詐百端、懷（三）人心術。其子孫三代皆啞なり」といへり。人の心術をやふるといへるは過慮おちひすきといふへし。たゞ無用の書をあみ、紙木を費すは、天物をはうてんすといふへし。もし其機功をいはく、近世、西鶴らか作れる草子は、其たぐ

み、『水滸』にまされり。今、唐すきする人、師をとりて『水滸』をよみ習ひ、甚しきは、かなをつけて梓行^{はんかう}す。無益の至りといふへし。

▼上八

上頓の辞世に、「われ死は備前の土になしてたへもしやとくりとなりもこそせめ」。山上憶良の心になへり。鄭果^{ていこく}、臨^{てい}死曰、「必葬^{てい}我陶家之側」。庶化爲^{てい}土、幸爲^{てい}酒壺^{てい}」。和漢ともに酒のみは同じ趣向也。

▼上九

病める時に、俗に「わるし」といふ。六朝の時分の人も「わるし」といふことはつかひあり。『世説』に「身今少惡」といへり。

▼上一〇

「梨もつふてもうたぬ」とは、かまはぬことをいふならん。今、をとつれなきに用るは本意をうしなへり。「潘岳^{はんがく}美姿、每^{はん}行婦人擲^{はん}菓盈^{はん}車。張孟陽至醜、每^{はん}行小兒以^{はん}瓦石^{はん}」投^{はん}之亦滿^{はん}車」。この故事より出るならん。老人ありていふ、「今時書生、故事しり自慢にて附会の説多し。此言、たゝ音もせぬといふ事をいへるのみならん。むつかしきことにはあらし」と也。予いふ、「さなのたまひそ。昔、鎌倉時分、禪宗はやりて、俗人も僧と問答して悦へり。僧は文学もあれば、漢語をつかひける。其語伝来して、いひ弘まりたると見えたり。漢字の音らしき俗語、おほくあたる文字ありと覚え侍る」と申き。

▼上一一

「いぬる」「いなん」といふ事は「往」の字にて「ゆく」也。上方にて「帰る」を「いぬる」といふはあやまれり。江戸にていはぬことは也。「立わかれいなはの」とよめるも「立わかれゆく」とつゝけたり。「帰る」とかけたるにはあらず。

▼上一二

広間に物頭已下勤番し、つれ／＼のまゝに物語打しけり。当番の医師、すきを見合せ来り、はなしをきく。物頭の咄しに、川越の夜軍をいひて、氏康八千の兵にて両上杉を破るに至る。医師いふ、「此軍は夜にもあらず。昼の軍也」といふ。物頭、聞もあらず、「法印は医者なれば、療治のことは能社しり給はめ、武辺の事はわれらの職分なれば、覚違ふことはなし」といふ。医師いふ、「本よりさ有へし。されと、医師も武辺咄しをすく故に、

いとまには記録をものそき侍る。武士にもたま／＼医道をすく人ありて、医師に手をとらすことあるならひあり」といふ。物頭、「それは浪人する時、くらひ物なきをかなしみて、用心に療治をたしなむ腰ぬけ侍のこと也」といふ。医者、「さもあらん。張仲景は、長沙の大守なれと、医者（貴）の祖と遺む。仲景なんそ浪人のきつかひあらん。今時の武士、非義をなして追出さるゝ時、辻切追剥おひはきならは、非道なからも武辺に似たり。多くはよし原のたいこをもち、又は銀かしの口入を業とす。是にくらへみれば、医師になるはましならん」といふ。物頭、すこしたまりたる内に、物見にて板を打ければ、論はやみけり。此軍のこと、物頭の覚違にてはなくて、昼といふを実記とすとなん。

▼上一三

北村政種といひし人の物語に、「箱根の温湯に浴しける頃、其地の細工人、神代杉といへる杉にて箱の類をこしらへて売侍る。「何とてかくは名付るぞ」と問に、「此箱根の湖のそこより大木の杉あまた引出したり。いつの代の木といふをしらす。よりて俗に付し名也。やつかれは是を「けゝら木」と名付申さん」といふ。「心はいかに」と問ふ。「すへて土地のさかひの印の木を「けゝれ木」と申侍る、此湖辺にあるへきよし、申伝へ侍る。其木のいつの時にか湖中へたふれ入たるならん。又、俗に西行法師の歌とて、「あしからやはこねのうみにけゝらありみくにをかけてたつはしら波」。歌のさま、西行とも見えねとも、是らによりて見れば、此杉はさかひ木成へし。よりて申侍る」となんいひける。予思ふに、山中にて自他の境をしるすに、多くは松にまれ杉にまれ、生木の大なるを証拠とす。このけゝれ木、必しも今の柵さくを立たるにはあらし。大木のしけりたるならん山、くつれ、岸つたひて落入たるにこそ。是によれば、「かひかねをさやにも見しかけゝれなく」のうたの「けゝれなく」を「心なく」といはんより、「さかい木なく」と心得は、よく聞え申さん」と政種申されける。此政種は津軽の家臣也。惟足齋神道伝受の人、歌は江戸にて人のしりたる程のすき人なり。冷泉家の門人也。

▼上一四

生るゝ子六指ならは、七夜の内に切てとるへし。血もいてす。痛もいまた覚えず。いゑて跡もなし。七夜も過れば、切ても跡より生すと也。

▼上一五

力の極てよはき人、至りておもき物をあけんとせば、旁の見る人必わらふへし。世人、多く浅智の身にて、大智のすることをせんとす。是も亦わらはるへし。

▼上一六

諺に「食後一睡万病円」といふ。或人云、「円にあらず。縁也。万病のよりて生ずる也。よしあし相反せり。唐に杜邠といひし人、満腹なれば必いねたり。或人、「養生の道にあらず」といさめしに、「君は布袋に米を入たるを見たまはすや。横にたをせは必ゆるまる」といへり。いつれかことはりならん」。余おもふに、飽後まくらをとりにてふすのみはかならん。ねいるはしかるへからず。

▼上一七

京五条、長講堂の境内に彝倫庵の墓あり。「前待韶侍講藤素心墓」とあり。或人のいふ、「正保のころ、天子に易を授たてまつりし人」といふ。しかるやいなや、審にせず。

▼上一八

「しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、大やうはせぬかよき也」と云語を、兼好法師、よろこひて『つれく草』にかきのせたり。われもまた是に似たる一語あり。「ありてもよし、なくてもよしと思ふ事は、大やうはなきかよき也」。諸子の説、是に近し。「好事不如無」といふ語はたれ人のいへるならん。又よくいへり。

▼上一九

弓を射るに、あたるを上手ともいはず、あたらずとも下手といはず。されど、あたらず上手はなきもの也。

▼上二〇

諸子あるより、自然儒者の名目出たり。陸王の学あるより、をのつから朱子学の名目出たり。然れば、儒者と称し、朱子学となふるは、このましからぬこと也。

▼上二一

或人、『法花経』に「釈迦眉間白毫東方万八千界を照す」とあるをみて、「仏の威光は十方に及ふへきに、東方にかきりたるは、わけあることか」と問ふ。余こたへていふ、「もとより此経中に「遍照於十方」とも見えたり。然るに、所々「東方」とあるは、羅什は天竺の人にて、天竺より東方にある唐土へ来りて、此経をやくす。此東方の唐土も皆仏の法身にてたつこと也といふ事をしらしめん為也。梵文は「遍照於十方」の心なるへし。羅什

か中国をあなとる心より「東方」といへる也。

▼上二二

界の府に、七郎兵衛といへる物、蝦夷へ商に行事、十二度に及へり。かの所の法に、商人を陸にあげす。此人は夷人よく見しりなしみたれば、ゆるして陸にあからしむ。よりて所々を見物し、よく覺たり。或時、海中にて大風にあひ、一所に漂着せり。目にさえきる物、みな蝦夷の様子也。されと、子午針を見るに、蝦夷の方にあらず。うたかはしき内に、所の人あつまりて、とやかく問答す。中に少しく言の通する人あり。所をとへは、朝鮮のぺあんといふ。しはらく逗留して送りかへされり。是をもておもふに、蝦夷は朝鮮につきたるといふは真也。蝦夷は津輕みまやと云より七里渡海し松前にいたる。是より西北へひろこり、南は朝鮮の咸鏡道にいたり、西北は女真の界に接すと見えたり。松前より北、上の国下の国といふ所へ往還各八日路なり。松前よりのいひわたし、此あたりにて及ふ。それより奥はくはしくはしれず。大抵日本の地に近き所は蝦夷の辺鄙也。奥にいたれば繁昌すといへり。

▼上二三

「くはす貧樂」とは、いたりてまつしき物のことわさ也。実にしからは孔顔の境也。

▼上二四

天王寺亀泉のうしろに小き石橋あり。或人のいふ、「古の石棺のふた也。はゝ四尺はかり、長さ一丈斗。いたりてあつし。四方に大なるつく有。土中にうつまれて、すこしくはかり見ゆ。つくかたか石なり」といふ。凡千年已上のもの也。

▼上二五

或人の申に、「造石の法、近江真の石灰をとりもちにてねりかたむ」といふ。

▼上二六

墨をつくる煤はいといふものは油烟松烟也。熊野のおくより出す。さつま日向よりも舟にのみ来る。いかなる下直の墨にても、外のものにてはなし。松烟なり。たゞよしあしの次第、さま／＼也。室をもふけ、四方に障子たてまはして、下にて松の心油の多きをたく也。油烟は外にてはとらず。南都のみ也。膠は唐よりきたるをよしとす。

▼上二七

日本と唐との間の海に「ちくら」と名付る所あるよし。是より唐にもあらず、日本にもあらぬ事を「ちくら」とは云也。王李の文は古今文章のちくら也。陸王の学は儒仏のちくら也。馮道ふとうはんしつ范質、行ひは聖愚愚のちくら也。

▼上二八

世人事をなたむることわさに、「五分く」と云也。かく心得れば、ものことにふかく入過さず、人をもとかめず、世をもかこたつ。程明道の語に「人事、皆非なるの理なし」とのたまへり。譬は、十のもの十なからあしきと云事はなし。其内にひとつふたつはよき事もありとの心也。

▼上二九

荀子の説に、「人の性は悪なり。善をするはいつはりなれば、誰（唯）聖人の教にしたかふへし」といふ。いつれの儒者か聖人の教を貴さらん。されど、みつからの身に教をうくる善性あるをしらすして一味地に聖人くといふは、是聖人に道をあつけ置也。此荀子、孔孟のむねに異なれば、後世とり用る人なし。三十年前、大坂に山内の何某といふ儒者ありて、荀子を信せし也。近年、又是を信する人有。おもへらく、人はみな蠢然たる頑物也。聖人のこしらへたる道にとり付て禽獸をまぬかる也。さらに人々、身に貴き物あるをしらす。

▼上三〇

「大塔の宮」をゆとうよみに「おほとう」とよむは、いつれの時よりあやまりけん。奈良にて、京の兵とも、大般若の櫃のふたをとりて、「大塔の宮はおはしまさて、大唐三蔵法師おはせり」といひしは、「大塔」「大唐」、音のかよへるによりていひし戯也。「たいとうの宮」とよむへき也。

▼上三一

正平三年に板行せし『論語集解』ありて、先年、予見侍りし。泉州堺の人、印板せし也。正平の年号は南朝に用らる。天下通用せず。然れば、その時に堺は吉野に順し証とすへし。凡板行の始也。其後に又『千字文』をも板行にゑりし也。

▼上三二

賢人君子に大なる遺恨のこと有。其功德によりて、勁敵たいてきほろび、国家無事なるに、多く、

「神明の守らせ給ふ也」、又「仙仏の加護ゆへなり」といふ。賢者君子の心には、ともいへかくもいへ、天下治れはよしとのみ思ひ、いきとほる心はあるまし。かたはらより見れば、口おしき事なり。

▼上三三

つよき弓に一寸、一寸二分迄もあり。一尺の弓といふはなきこと也。「一寸二分の弓あれば、一尺の弓あるましきにもあらず」といはし、弓の理をしらぬ人也。旁に儒者ありていふ、「しからず。大人の国にて大竹あらは、一尺の弓もあるへし。今、日本一国のつもりにていふは、せはき見なり」と。是しからず。『家語』に、防風焦堯せうせうのこと有て、短長の極とせり。一尺の弓は防風氏も引うるることならざる理也。儒者又いふ、「鉄炮にておしていはし、三匁四匁の筒は常の事也。それより五十匁百匁ないし一貫目に及ふ。五貫目の筒もありとなん。その弓の説によらは、五貫目の鉄炮はなき理といはん。笑ふへし」。答云、「是、そこには弓鉄炮の理をわきまへられぬより、さはいへる也。弓鉄炮とも人ころすはひとつにて、其用は異也。弓は人の刀にて射るもの也。鉄炮は火の力にてうつるもの也。いか程の大筒にても、一点の火にて打出すことなれば、「五貫目の筒あるまし」とわれは申さぬ也」。

▼上三四

奥州白川の人喜内といへるかいふ、「奈須野に殺生石をみ侍りし。方四五町程垣ゆひまはし、其中に石大小あまたあり。いつれか殺生石なる事をしらす。其傍に鳥獸の死けるとおほしき有。時によりて其ほとり吹出る氣あり。其時は、垣の内はさら也、あたりへも近つくへからず。生豆をかみたる時のときあしき匂ひす。是にふるゝ物は、人畜をゑらはす、皆卒倒す。必しも石に毒あるにはあらず」となん。是ぞ実説ならん。枯井はいこう廃窖はいこうに入て、陰毒にあひ、死すると同し。世には信石なりといへど、信石は制して火を得て毒甚し。およそ下野の国山川風氣のすこきありさま、大に他国にこと也。

▼上三五

「生々之謂易」「天地之大徳曰生」。宇宙の間は、誰何たれなにとなく生々するのみ。生々の行はるゝは、死といふ事ある故也。然れば、死も又生也と云へし。諸子、みつからの道を立て、天地の外に至理ありとす。見ぬところに至理もあらはれ、先眼前この天地なくんは、人もなく事もなく法もなし。皆天地ありての上なれば、其人其法ともに天地の外にのかるゝことなし。然れば、天地外の道を説とも、天地の内の道を本とすへき事也。天地の内の

道とは聖人の道也。

▼上三六

昔、山田春城といふ人有。「為^レ人寛裕、其詞正直、無^レ所^二阿枉^一、無^レ好^二小芸^一、不拘^二忌崇^一、頗得^二儒骨^一」と『文徳実録』にのせられたり。嵯峨太上皇の皇子源順の学業を成就せんとおほして、よろしき学友をもとめ玉ふ時、此春城えらはれて、めし出されたり。後、駿河の介となる。此国にあき太神といふ神有。禰宜ともさま／＼の奇怪を作りて、国司并に吏民を迷はしめたり。春城、任にいたると、其まゝそのいつはりたくめることを正しあらはし、是を制禁し、誰^誰歳時の祭祀のみをつとめさせけり。是より国中の妖言なかく絶え、人々、その聡察^{はつめい}に感なしけり、としるされたり。此時、上下ともに神にへつらひ、仏にねいする時なるに、此人のみたくじとして流俗にしたかはす。儒者の風骨を得たりといへるもむへ成哉。

▼上三七

天地の間は陰陽のみ。仁義も剛柔も皆陰陽也。此ことはりにしたかふを人の道とす。天竺も唐土もわか国も、およそ人の人たるくに、是にもるゝ国なし。古へ、伊弉冉尊、さきたちて言をあげ玉しかは、伊弉諾尊、是めをのことはりにたかへり、とてあらため廻らせ玉ひて、を神言をあげ玉ひしかは、この大やしま定りはしまり、日の神生れさせ玉ひ、無窮の神祚をひらき玉へり。あふきとうとむへきことならずや。

▼上三八

人家の器物を「什物」といふは、周の軍法、五人を「伍」とし、二伍を「什」として、其器物をわかちわたすよりいひはしめたり、と元の虞裕^{ぐよう}か『談苑』にいへり。今の俗、寺流の器物にかきりて「什物」といふはあやまれり。

▼上三九

岡西宗貞といふ人有。不学なれと、すこふるさとき生付也けり。それかいひけるは、「我、仏道を何となく貴ふ故に、仏をおかみぬかつき、僧尼に物をほとこす也。されと、人の生れかはると云事はなき事故に是はかりは信し侍らす。譬は、今日本の人を男女をわかちて四五十年別々に置は、人はなくなりて、誰^誰鳥獣のみほこりふえん。もしその時は、男女相交らして自然と子をうみ、又は蚤虱のわくことに人生れ出」といはし、「是道理をしらぬ人ならば、ともにかたるにたらさる也。人は男女相交てあらたに生れつけ、生つゝく

る也。万物を用るにあらず」と申き。

▼上四〇

唐土の人は多くは井蛙の見也。わか国の外には人も人ならずとおもへり。故に外国の人を犬羊の性と云へし。腥羶せいせんの習俗なといへり。天竺てんしゆくも西戒さいかいの内なれば、又いやしむかきり也。然るに、仏といへる道は犬羊の性の人のいひ出へきにあらず。是にて其偏見をいましむへし。天地の間、数しらぬ国なれば、いかなるよき国あらんもしるへからず。あまつさへ僧となる人は其いやしむ西戒さいかい犬羊の性、人のいへる仏法は日頃中華中国とのしる先王、周礼の道に増れりとおもへり。いかなる故といふ事をしらす。

▼上四一

今の俗、産所を「わらのうへ」といふ。唐土もしかり。『世説』に「在レ草不レ起レ子」といふ。わらの上にて子をころすこと也。晋の賈后の伝に「内二藁物一産具」とも見えたり。

▼上四二

古、水の上を行通ふ物を「だ」といへるにや。「ひらだ」は、ひらたきふねなり。「いかた」は「ゆかだ」也。ゆかの如くなる物也

▼上四三

世にはほめすぎと云事の多き也。凡夫のすなほならぬまゝに、すこし正しきをあまりにとりはやす也。小松重盛是成へし。上には清もりといふ驕悪の人あり、下には宗盛と云頑愚くはんぐの人有。是と見くらへて、重盛のおとなしきを賢人君子といへる也。まことに賢人君子ならは、其身大臣大将とならん時、威福の戒を思ひ、鬼瞰きかんの理をさと、官職を辞し謙損卑下けんそんひげならば、虎にのるの勢あるまし。清盛、「いな」といは、其時こそ古今を引、富貴を極れば家の災なることを説は、清盛をのれすてに富貴を極ぬれば、是よりは子孫をはかる心出て、なとか承引せさらん。是よりは重盛心のまゝに行はるへし。重盛の身にとりては、一先清盛をとらよりをろさされは君臣の道立かたし。勢つきてをるゝと理をしりてみつからるゝとは大に心かはりなん。諫をいれたるも、わづかに法皇を押こめ奉るをやめられたるのみ也。其外の我倂恣がへいそのふるまひは露もあらたまらず。其身、富貴を極め、藤氏のれきゝに官階超起くはんかいてうえつし、子弟一門、公卿を凌りやうれき二（足十歴）蹂躪しうらん二（足十閑）し、天下の物議うはぎ議ぎきやうくとして、人神いかりにくむに至りてせんすへしらす、世をのかれんとし、命をちゝめんとし、灯籠の非礼を興行し、金渡しの愚痴をなす。是一己の現世未来の安をはか

るのみ。はたして世の為家の為、何の益ぞや。もし公忠の実心にてふるまはんに、清盛ふしきの事のみ行はれんには、主上皇の命をもて押込をかんも不孝といふへからず。くしたる小松殿の教訓、きくもはかなく覚るなり。然れば賢人と云は真言にほめすぎと覚ゆ。

▼上四四

候国にて臣下をしりそけ出して、他の国に仕ふることをゆるさぬを「奉公をかまふ」といふ也。是は年月をへて又よひかへす為なり。他国の臣となるを惜ゆへ、されは奉公をかまはれぬは仕官の上にてはちとす。然るに、今の世の「奉公をかまふ」と云は、多くは其人に難義させんとの意地也。然らば、かまはれずしていとまたまはるはよき仕合ならん。一概に論すへからず。

▼上四五

「としを経て花のかゝみと」のうた、凡池は年をふるにしたかひて、うき草みさひ生て、ものゝかけをうつさす。此池はかりは幾としへても清潔なれば、春ことの花の鏡となり、つみにくもる事なし。誰^誰花のちりかゝる時をのみくもるといはんと也。すへて池を鏡にとりなしての趣向なり、と三輪子の物語に聞侍る。

▼上四六

米の中にわく細なる虫を「こくぞう」と云。穀^{こく}蠹^と成へし。よりて、世に無能にして食を「こくぞう」と云。

▼上四七

弁をもて人をいひつのるするは、誰^誰一時の機にて、しみて説をつくるには及はぬ事也。一休和尚のもとへ壇越一人きたり、仏に供したる菓子わらをつかね、人のおかむ方にはかり菓子を付けた。和尚にとふ、「此菓子は如来にそなふるか、又は人にみする為なる歟」。和尚云、「仏にそなふる也」。「然らば、いかに仏の方に菓子はなきぞ」と云。和尚、しはらくありて、「そなたの羽おりのもんは自身の紋か人のもんか」。「みつからの紋なり」。「自らの紋ならば、わかみる所にのみあるへし。うしろにもあるはいかなり」といふ。檀越、言なしとなり。

是、一時の機によりて人を屈する也。唐土にて昔堅白同意の弁、晋朝にて清言の類を禪家にうつしとれる也。若是を論せは、一休の説はあやまりなり。人の衣類のもんは身のしるしなり。凡しるしは人に対したる事也。仏前の菓子の人の見分をかさるとは一やうなら

す。また、檀越の一体をなしたりたるも面白からず。一体の心は、菓子をそなへぬもよしと思ふ人心なれば、わらもくはしも同し事にみなせり。

▼上四八

今馬をのり入るゝを「せむる」といふ。『大載礼』に「四月執陟攻駒」、其下に「攻駒者教_レ之服_レ車」とあり。人の騎_おると車をかくるとの違あれと、「せむる」といふは一なり。「せむる」は則をさむる心也。

▼上四九

僧契沖云、「ゆふ」は、はひまゆみといふ木とかや。安芸の国より多く出と見えたり。『和名集』曰、「杜仲、陶隱居本草注云、杜仲一名木綿（杜音度、和名波比末由美）折_レ之多_二白糸_一者也」。又祭祀具云、「本草注云、木綿（和名由布）折_レ之多_二白糸_一者也」。木綿に木と草との兩種、異国にもあると見えたり。陸龜蒙か「木綿花時猩々啼」と作れるは、いつれをいへるにか」といへり。《按するに、此本草の注の「木綿」といへるは蚕のわた也。中より生す。此杜仲の中にある綿は木にある故、「木綿」といへる也。今の綿花を云心にあらず》

杜仲は、ある医者といふ、今俗に云「まさき」也。折れは白き糸あり。是なり。然るに契沖、木と草との兩種ありといへは、今の棉花_{きわた}ことにとりちかへたりと見ゆ。杜仲は灌木の類にて草はなし。今の棉花には草と木との二種あり。『天工開物』云、「棉花、古書名_ハ枲麻_{シマ}。種有_二木綿草棉兩者_一、花有_二白紫二色_一」。是は今の俗の木綿也。古の枲麻といへるはいかに。おほつかなし。此木綿、両国の種にて、中古、唐へも渡りし也。高麗へは元の時、高麗の使とりて帰りしといふ。日本へは嵯峨帝の頃、崑崙人、わたの種を持渡れり。上よりの命にて所々にうへさせられとも、行はれすしてやみけり。其後、うへ始たるは豊臣氏の時也といふ。古は織て布にする法、又はその器具なかりし故にやみけるならん。其後は種々の器具ある故、次第にひろくなれり。「島夷卉服_{とういきふく}」の注に「吉貝_{きつはい}」を引て「今の木綿布なり」といへり。〈「吉貝」、『輟耕録』にくはしく見ゆ。『唐書』外国伝に「吉」を「古」に作る〉古へわか国に木綿はなき事勿論なれば、神代巻にいへる「ゆふ」を木綿と見るは大にひか事ならん。然れば、「ゆふ」は麻の別種か。又は、かうその類成へし。『延喜式』に木綿多く出たり。「鴨頭草木綿_{あをそふかみ}二十枚」などいへり。是、青花紙の事也。又、安芸木綿ともいへり。又、「木綿一百帖」ともあり。是にては紙と見えたり。

▼上五〇

并河翁いふ、荻生茂卿は温厚にして博識の人なり。ひとつおかしき事あり。誰我はかりしりて人はしらぬとのみ思へり。我なかまと出あひて広く世に交らぬ人、このくせあり。

▼上五一

『万葉集』をみれば、天地の間に歌によまれぬ事なし。『詩経』をよむも亦しかり。詩も歌も後世文辞きれいを主とし、風情雅馴をこのむより、是はよむ事つくること、是はよまぬ事つくらぬ事、いふことは、いはぬ言といふこと出来れり。つゝには詩歌とも詞をかさりていつはりをいふことになり来れり。人の心を種としての語、詩は性情をいふの詞は、詩歌の本とする所なれと、詞をゑらむより本をうしなへり。文章の道も修^{おさむ}辞といふになつみて、錦のきれをあつめて是をぬひつゝるか如し。わらはへのひとつ身にはよけれども、大人の衣服には用へからず。いはんや易にいへる修辞は文章家に云所とは其心かはりたり。

▼上五二

「やまと」の訓、「山外」なるは、予か家伝来の説也。他家の説にいはぬ事也。先考、かつて貝原篤信と下河辺長流とにかたられし。篤信は『釈名』をつくりて己か説とし、長流は僧契沖にかたり、契沖、『代匠記』をつくりて己か説とせり。

▼上五三

「かし」は櫛^{くし}なり。『延喜式』に「青櫛乾櫛」と見えたり。祭祀の器皿^{うつはら}の用なり。葉を専らに用るによりて、「かし」に「は」の字を添て「かしは」と云か。「かしは」に「柏」の字を用るは俗の説也。柏は桧の類也。側柏^{そくはくえふ}葉を「このてかしは」と云は、近來物産家の説にてあやまれり。「このてかしは」と云は則櫛也。

或人曰く、「柏の字を用るも古きこと也。『和名抄』に出つ。『延喜式』にも通用せり」と。しからず。『延喜式』にふたつながら用たるは、櫛はかしの葉なり、柏はひば也。桧の木の葉もかいしきに用たる也。今も其遺風ありて、昔菓子の下にひはを用る也。

▼上五四

京師に矢人^{やし}川村何某と云ものあり。時の上手也。然るに、其家にいたれば、わつか九尺の店にて、矢からは一筋もなく、烟もたてかねたるさまなり。其他の矢人は大みせをかまへ、矢のゝ多くつみおき、人居らひて矢をため羽をつくる也。然るに、下手なる故、田舎へ下す鹿矢のみを作る也。すへて矢にかきらす、巧匠はみな貧し。

明の時の儒者あまたある内に、王遵岩、帰震川ときは門をとちてせうさくたり。用る所は学ふ処にあらず。尊ふ処は用る所にあらずと見えたり。

▼上五五

我国にての大海はくしら也。《俗間に鯨を「くしら」といふ。一説に、鯨は江河の魚にて海中になし。「くしら」は鱠也といふ。しかるに、『文選』『海賦』に「魚は横海の鯨」とつくりて、「顛骨嶽をなし、流膏淵をなす」といへり。しかれば、鯨鱣の別いかゝあらん。覚束なし。》唐土にては是を海鱣といふとなん。至りて大なるは三十ひろあり。是は常にあらず。平常は十四五ひろ、至て小きも九ひろ十ひろはありといふ。其ふとさ、たけにひとし。無鱗也。少し鱗あらは、もり入ましかれば、取得ることかたかるへし。うろこなきは世人の幸也。一疋の脂あふちくひけすち肉須筋のあたひ、凡銀五十貫目程也。脂、其半分のあたひ也。はらわたも煎て脂をとる。骨も所によりてけつりて、かふらほねと云也。筋はわた弓のつるとなる。誰（唯）、頭のみすたり物也。ひれといふはひけの事也。ひけは則其齒也。へつにかたき牙齒きははなし。九州の内にてならして一年に三百ひき取也。其とるやうは、大指のふとさなる縄にて大なる網をつくり、海中潮のゆるき処にはり置、あまたの船にてふなはた舷をたゝき、追ふて網の内へ入、くしらつゐには網をつきやふり、身にまとひ、はたらき自由ならず。其時にもりを入てつきとむるなり。昔は網を用ひず。故に多はとりにかしたり。網をもて引とるにはあらず。身をはたらかせしとなり。

▼上五六

人の道を修行するは、ろくろのつるへをもて水をつくりあくるかとし。今つるへをさくるは汲んとはあらず。水をあくる也。あけんとするは則汲んとする也。ふたつにてひとつ、ひとつにてふたつ也。

▼上五七

人の問ける、「矢を何（何）そ」といふ。其字いかゝ。「束」の字にてあたりや。こたふ、『礼記』に「宗廟の牛、角握つのあく」とあり。握とは側手そくしゅを云。側手は四指をそはたつるなり。四指をそはたてたる程の長さの角の生する時に、祭祀に用る也。唐土にて後世に「幾把いくは」といふ。日本にて「幾そく」といふ。皆此四指をそはたてる程の長さなり。「束」の字あたらず。「側」の字ならん。

▼上五八

『続日本後紀』に、仁明天皇の御時、伴の友足と云人有。獺をこのみ、常にけものをかりありて、鹿をとれば其肉のよき所は天子に献し、あまりは公卿にそれ／＼に贈遣し、おのれも打食て一きれもあまさす、とあり。『延喜式』内膳式に、正月元日より三日迄の天子の供御のいのしゝ鹿肉は近江の国より貢す。此外、神代より獣肉を上下ともに用ひ来りたまへるに、如何なれば後世に至りて穢とていませ玉ふにや。『江談抄』にも此事をいひて、いつれの時よりいませ玉ふにや、とあり。又、『延喜式』民部式に、諸国より牛乳を貢す。今いふ「ほうとる」の事也。典薬式にも出たり。是を「蘇^そ」としるされたり。蘇は酢^そと同じ。牛羊の乳汁をいへり。

▼上五九

僧青山云、「日本のうたを「和歌」といふはたしかならぬ事也。『万葉集』に和歌といふは人の歌を和したる也。やまとうたといふ心ならば、「大和歌」とか「倭歌」とか書へし」といひき。『詞林採^{さい}要』といふ書を見しに、「敷しまは大和の皇居の名なれば、やまといふと同じ。やまとことの葉、しきしまの道、同じ心」といへと、おほつかなし。

▼上六〇

「しき島の道」といひて歌のことゝ行る。是も和歌の類にてたしかならず。「しきしま」、「やまと」ゝつゝけたり。「しきしま」とのみいひて日本のことにする例なし。

▼上六一

『日本記』に「地震」を「ないふる」と訓したり。「地」の字の訓、「ない」なる歟。「つち」といふは土の事にて、天に対せず。天に対する地は「ない」といふべきか。後世の俗に「ない」とはかりいひて地震のことにするは誤也。

▼上六二

「日」の字を「か」とよむ事、小碓尊の「かゝなへて日にはとをか」と云を初とす。然るに、外にて「日」を「か」とよむ事すくなし。余案するに、「日」を「ひ」とよむは日月の時也。日をかそふる時には「か」とよむか。「こよみ」と云は「かよみ」の心、日をよみかそふる心也。「かすか山」は本は「荻菅山」也。春日の雅名にあらためらる。春はかすむ故、春を「かすみ」とよみ、「か」には「日」の字を用る心成へし。

▼上六三

焼餅をうる老婆あり。或人云、「老婆は年いくつなるそ」。「八十也」といふ。「其年迄焼餅をすれは、さそく上手ならん」。「やけはやく程くらかりへ入やうなる物。是迄ひとつも焼おほせたるはなし」と云。世の人、をのれかすける道にても、けいにても、高上の理をつけて人にほこるを、中正の道より見れば、いづれもこの老婆の焼もちの如し。

▼上六四

天下の雪は近江と越前との間の山、尤ふかし。寒気は信濃飯山、尤甚し。余、少年の時、飯山に三年斗り住侍りしにてよくしれり。冬の朝を起出て初てたはこをすふに、吸口の金唇にひしと氷つく也。やかてははなると、甚しきひえやうなり。四方雪にてうつむ故、風はいらず、はたの寒きはさのみ甚しからず。

▼上六五

今のいろはと云物は、護命・弘法、ふたりのつくれる長うたのこときなり。是にて日本の詞みなくつくすといふはおほつかなし。いかんとなれば、先今時云かなつかひといふをしはらく置て、人の口より出る声にて此長歌をよむに、「ハホヘヒムケフ」、此七の声なし。「ワ」ふたつ有。「ヲ」四つあり。「エ」「イ」各三つあり。又「ケ」「フ」のふたつを合せたる声有。是にてことはみなありといふへけんや。是よりかなつかひといふ事をはしめて、おくの「ヲ」、くちの「ヲ」などいふ事をいひ出せり。あまねく人にしみこみて、いふかる人なし。口より出る声と文字に書るとくひちかへり。口には「いろわ」といひて、文字に「は」とかく類なり。「いろわ」と書は「わかよ」の「わ」と同じ声出る也。唇舌牙齒喉のたかひありといは、四十七字、字々みなしかり。この数字にかきるへからず。

▼上六六

犢鼻褌を「たふさき」とよむ。『釈名』に「褌は貫也。両脚を貫き、上腰中につなく也」。司馬相如か伝に「犢鼻褌」の字、出たり。注に「今三尺布作形如犢鼻」とあり。是、両足をつらぬく故、孔二つありて、牛の鼻さきの如し。是によりて名つけたる歟。然れば、こしより股の半迄あるものと見えたり。今にていへは、もゝ引のきやはんなきもの也。日本も昔は是をつけたるならん。今の一はどの布帛にて、たて横にからみ付たるは、戦陣の時、鎧の下のためこしらへたるものにて、ちかき事と見ゆ。「たふさき」の訓を川井立牧といへる人、「またふさき」のうへを略せる歟」といひし。さもあるへし。後世に「たふさき」の訓をとり失て、「ふんとし」といふ。余おして思ふに、是「ふみとをし」の略語成へし。両足ふみとをして着る物故也。もゝ引など、みなふみとをし也。「ふ

み」を「ふん」といひ、「ふん」を「ふみ」といふは和語にて其例多し。

▼上六七

「墨は餓鬼にすらせ、筆は夜叉（おに）にもたせよ」と俗間に云也。陳繼儒か『岩栖幽事』に、「磨（ひ）墨如（ひと）病夫（ひと）」、把（と）筆如（ひと）壮士（ひと）」といへり。墨は真にかく有へし。筆を甚かたく取事いといふかし。

▼上六八

『書経』に「福（ふ）善（ぜん）、禍（わざ）淫（いん）」とあり。また「為（な）善降（くだ）之百祥（ひゃくしやう）」、為（な）不善降（くだ）之百殃（ひゃくおう）」とも有。「繫辞（けいじ）」には「積善の家には余慶あり。積不善の家には余殃あり」とも見えたり。是、天の御心にて、人君是を奉て其罪を明らめ、世にもしらしめ、罰（ばつ）をおこなひたまふ。いはゆる「天工人其代之」なり。乱世に至りては、天意を奉ずる人君なき故、凶惡の者、幸に刑罰をまぬかるも有。善人も不幸にして禍患をかふむるもあり。然れ共、天の賞刑（しやうけい）は常に身におふとするへし。

▼上六九

多くひなを伏せる腹に毳（け）なし。誰（誰）左右毛おほひ重なりて、毛あるかことく見ゆ。たまこをあらたむるに、はだに直にあつるか為也。或人のいふ、ひなの長してはしめてたまこを生てあらたむるを見るに、みづから腹の毛をくはへぬきけり。又、ひよこあかりのしゅうましはりてたまこをあらたむるに妙なるに、ましてかゝることのあるは、まことに天地自然のことはりありかたきことなり。この智は是天のあたふる所、生々の道也。今もしめとり・をとりをわち置（わ）て生育（こをうむ事）なからしめは、人みな是を不仁といはん。

▼上七〇

孝謙天皇のみことのりに、「国を治め民を安するはかならず孝をもつて治む。百行のものと、孝を先とす。天下の家ことに『孝経』一冊をもたしめ、講習せしめよ。孝行の名あるものは所の司よりまうし上よ」とのたまへり。此時仏法さかんに行はるゝ時なれと、眼前の政はかく人倫の道によらせ玉へり。孝の道大なりと云へし。

▼上七一

日本の弓、もつとも大なり。故に「夷（い）」の字、「大」「弓」の二字をひとつに作れりといふ。『説文』、「夷」の字の注に、「从（した）大从（に）弓、東方之人也」といへり。又、「夸」の

字もあり。「夷」の字と同し。是等によりていへる歟。

凡伎芸器物多く唐土よりつたへ来るに、弓のみは日本のせい也。『三国志』倭国の所に「木弓短^レ下長^レ上^レ」といへり。是、日本の弓の制、往古唐土にて聞えたり。

弓のたけ長きにより弣^{にきり}を真中に置ては射るにたよりよからず。中央にあるへき弣の下にあるは、真に日本にかきりたる事なるへし。是より射法もやゝたかひあり。高穎^{かうえい}かつくれる『射学正宗』といふ書有。日本に渡りたる弓書の内に、此書ほと精みつ成はなし。竹林派の射術は多く是より出たりとうけたまはる。其内に、まとのみとめやうを種々にいへり。我国の法には一条の妙所あり。弓に目あてといふ事なし。目のそゝく所は、矢、かならず至るといへり。然るに、是、上手の上にていふへし。下手には目あての法をいふも可なりといふへし。「雲外聞^レ声夜射^レ鴻^{かうを}」といふは射の極意をいへりとぞ。

▼上七二

世の中のありさまを見るに、古今の別、彼此^{ひし}の分、さらになし。古とても風俗のあしきことあれば、後世とても同し。同じければとて、とり獸の如くにもならず。禽獸のことくにもならぬは、秉彝^{へいい}の善性は天のあたふる故也。然るに、性の外にならほしあり、はやりことありて、それに染ては秉彝^{つねをこる}の性をもなくするにいたる。今の世むかしの世とてもしかり。『論語』に「群居終日、言不^レ及義、好行^二小慧^一。難^{かた}矣^い哉^{かな}」とあり。人の言行、かならずもあしきにあらずして、とにかくおとなしからず。高それとやいはん、放蕩^{ほうとう}とやいはん、傲慢^{かうまん}とやいはん。此風俗はひと／＼にかはり、面白きと思ひつくより甚人をそこなふ也。明儒、晋と宋とをくらへて、宋の謹厚なるをきらひにくみ、晋の風俗ほうとうをひいきにするの風、近年わか国へもならひ来れり。大に歎くへき事に社。

▼上七三

明の詩家の踏襲^{とうじゆ}をそしる人あれば、ある人のこたへに、「今年の鶯花は去年の鶯花なり。今の鶯花は古の鶯花也。古の鶯花なれば、ふるしとて捨へきか。是にて踏襲の非ならざるをしるへし」となり。

わかおもふに、此説尤なるに似てひか事也。鶯花はもとより古の鶯花也。然るに、今の世にはやる踏襲は、昔の鶯花を日ほしにして春ことになかめよろこふなり。去年の鶯花はちりさりて、ことしは又めつらしく花咲鶯来る也。踏襲をにくめはとて鶯花を用さるにあらず。精神なき日ほしの鶯花にはあらず。

▼上七四

近年の詩を作る人、わか国の地名をやめて、唐土の地名とす。其詩をよめは、唐の地名有か故、唐めきてよき詩のやうにおもはる。詩中に入るゝ地名、至りて不雅なるは、よる所ありて一字をとりかゆる類はくるしかるまじきか。「箱根」を「函嶺」なといふ類也。

又、愚なる人は、唐の地名なれば皆雅馴にて、日本の地名はおしなへて不雅と思ふ人あり。「尼山」「姑蘇」といへは雑也。「尼崎」「姑棄」といへは不雅と思へり。畢竟見識なき故也。此頃、人の詩を見しに、兵庫の海を「湘水」といひ、「淀川」を「楚水」、「大坂」を「西蜀」といへり。何のよることをしらす。かくいはゝ「撰」「河」の国を「齊」「魯」、「つくは山」「金剛山」を「天台山」「泰山」といひてもよろしかるへきか。顛倒錯乱尤甚し。かくいへは、かれ、必「これは道学先生の理屈也」といはん。

又、かゝる流をきらふ人有、事々是に反す。「鶯楓は日本になきものなれば、詩料に入へからず」といひ、又詩をとくに俗語を用ゆ。是も又甚し。日本のかへての木は大かい楓に似たり。土地の異にて少々のかはりあると見えたり。東国のかふらはなくて大根の如し。然れ共、かふらにあらすといふへからず。京師、鷹みねの大根はまろくてかふらの如し（是を世にからみ大こんといふなり）。されと大こんにあらすといふへからず。然れば、楓に似たれば「楓」と作るもくるしかるまし。鶯は真に似たるものにもあらねと、春に至りて囀するはおなし。「かへて」を「楓」といふに比すれば、誣たるなれとも、詩なればゆるすへし。然るに、一見識ある論なれば、大かたの人の合点ゆかぬこと也

▼上七五

「無花果」を「いちしく」といふ。和語にあらす。この種、むかし日本にはなきもの也。『本草』の異名に「映日果」とあり。「ゑいしつくは」とよむを転して「いちしく」となせり。

▼上七六

荀子の書に、「口みゝの間四寸のみ」といへり。今の曲尺にて四寸程也。周尺のつもりにては甚みしかし。荀子、周の末の人也。周尺にていひつらんと覚ゆ、覚束なし。

▼上七七

日本の古、文字のさかんなる頃、經書をよむに、字の四隅と中に朱をもて点をほとこして助語のしるしとせり。^{ニハシ}かくの如し。其外にも法ありとぞ。委しくしり侍らす。是を「をこと点」といふ。

土橋宗信いへるは、「「てにをは」といへることはは、此をこと点より始めりと覚ゆ。

四声を点する法にてよめは、四すみの助語、「てにをは」とよまるゝ也」。此説大によし。よりて思ふ、其始て此法をほとこす時は、四隅斗ならん。外は追てましかける歟。

又、誰やらのいひけるは、「此法、『論語』の初め、「まな^んて。時^に。是^を。なら^は。」といふより事をこれりと思ふ」と也。

▼上七八

「飯」は「いひ」也。「めし」とは云へからず。古は唐も日本もむしいひ也。「めし」とは「むし」也。婦女のかくしことはならん。

▼上七九

「総角」を「あけまき」とよむ。童子の髪上へあけてまるくまくゆへ也。『世説』に「兩丸髻」と見えたり。『詩経』に「総角^{くはんたり}牝^め」とあり。「牝」は『説文』に「束^{かた}髪^ち貌」と注す。此字、象形也。まるくとりあけ、其末を左右へさけたり。いま、鎧のうしろに大袖をひかゆるものを、又「あけまき」と云。其ひものむすひさま、総角の髪に似たる故也。

▼上八〇

伊藤東涯、『制度通』に、唐土を四百州といふ事、呂東萊『紫微話』をひかれて、「李方州、贈^{しよ}汝州太守」詩云、安得吾皇四百州、皆如^{しよ}此邦二千石」。又、『水滸伝』に「一条棍棒、等身^{ひんてく}齊、打^う四百軍州、都姓^{すへてせい}趙」。ふるくいひ来れり。

▼上八一

日本の七道のうち、西海南海の二道は唐宋の道わりのことく一団^{たん}の地なり。其余の五道は帯の如くほそ長くわかつてり。是は、其かみ、「道」と云字になつみ、東西へ往来するみち筋と思ふによりてなり。唐宋の道の心は、山東道なれば山東中の諸国往来の道、東西南北いくらもある故也。一筋の道といふにあらず。東涯もあやまりて説を付られたり。

▼上八二

「奏樂」を「樂をかなつる」とはいふましき也。「かなつる」は琴しつにかきれることは也。「かきなつる」也。樂^{ひんてく}一更^{ひとひ}端^{はた}を奏^をといふ。かきなつることにあらず。今人^{（衍字）}

▼上八三

今人を打事を俗に「くらはす」と云。『堯山堂外記』に云、「鄙語、謂^{あふを}遭^{ぞう}杖^{しやう}為^を餐^{さん}」と

あり。和漢心同じきもおかし。

▼上八四

『中庸』、「素其位而行、素富貴行^二乎富貴^一」。朱注、「素」を現在と注せるにより、訳者、格別のことと思ひて、「富貴にそして」とつけた。古注に「素^ハ郷也」と注す。「郷」は向なり。「さき」とよむ心也。「さきより富貴なれば」とやくすへし。朱法の改られし心は同じことにて、さきより今に至る迄といふ心にて、念を入たる迄也。然れば、やはり「素」は平素の心にて、今の俗語にていはし、「じたいから」といふ也。「もとより富貴なれば富貴に行ふ」とよみて本文にかなへり。「富貴を行ふ」とよみしもあしし。「行ふ」とは道を行ふなり。じたいから富貴なれば、富貴の上にて道を行ふと也。「乎」の助字に心をつくへし。首節の一句も「もとより其位にして行ふ」とよむへし。

▼上八五

世人、「為」の字を「なす」とよむより義をあやまる事多し。「人皆可^三以為^二堯舜^一」とは、堯舜をすへしと也。此一章、あまたの「為」の字、みな是より生して「する」とよまねはかなはず。「なす」とよめは「成」の字と成なり。天下の人、いかんそみなく堯舜か大徳をなすことを得ん。孝弟をするは即堯舜のする所をする也。「われ堯舜にあらされは、堯舜のする所は得せぬ」と云筋なし。顔子こときのそう明の資質^{しつ}ある人、堯舜のする所をしてやますんは、堯舜の大徳を成就せん。然るに、是は千万人の一人なり。顔子の言とて、『孟子』に「有^レ為者皆如^レ此」とあり。此「為」の字、この「為」と同じ。王陽明の「必為^二聖人^一」といふを志とす」といはれしは、聖人の大徳をなすといへる心とおもはる。しからは、唐土の人も「為」の字を心得違たるもある歟。「為^二は造作^一の訓にて成就の心なし。

▼上八六

客^{かく}庁^{てい}の番^{とまり}直^ちする人ありて、かたすみによりて物書を見れば、一まいの紙を横におりて、細字に「南無大慈大悲觀世音菩薩」と数百書つらねたり。「何故かくはし玉ふそ」ととふ。「かくすれば、かならず觀音の利生を得て、極樂国に生れ、仏となる」とこたふ。「其紙はいかゝする」といふ。「火にくへる」といふ。余、たわむれに云、「今譬は、わか御主人の姓名を其如く書つらねたらんには、人、な^あならず不敬といはん。火にくへたらんに、主君をのらふとせん。然れば、觀音とてもよろこひ給はし。かへりて仏罰にやあたらん。其いとまに今生にて觀音とならんこそねかふへけれ。今世にて仏とならんはいかゝ。大慈

大悲とは慈悲の大なるをいふ。慈悲とは人をさい度する也。人を済度するは、人の為になる事也。先眼前に人の為に成事を修行すへし。「眼前とはいかに」。「親に対してはおや御為、主人にたいしては主人の御為也。親の御為に成は孝也。主人の御為に成は忠也。是より衆生に及迄、皆かくの如くならば、是を大慈大悲といふ。是、観音の境界也。今生にて観音の境界ならば、後生にて仏となる迄にはおよふまし。無用のひまついへに仏名書ならふかことし玉ふな」と申侍し。其人、いかゝ聞とりけん、しらす。

▼上八七

からすはきわめて鄙賤の鳥也。其ひなの時、くちはしをひらきて、親鳥のはぐゝむをまつ。すこし長すれば、親鳥のくちはしの動くをみれば、おのか口はしをおしこみ、親鳥の口の中の物を食する也。是をわきよりみれば、子鳥のかたより親鳥の口の中へ食物を入るゝに似たり。是をあやまりて反哺の説出来れり、と或人の申侍し。さもあらんと覚ゆるなり。かくいへは、孝の道をやふるに似たり。然に、孝と云は人のする事にて、鳥類のあつらゆることならず。孝を鳥獸にあつらゆるは、孝道のおとろへたるより起れり。鳥獸の親をしらす、無道なるをみて、人はあの如くにはせぬものとかへりみるこそよけれ。此外、「鳩に三枝の礼あり」「蟻に君臣の義有」などいふの類、おしてしるへし。

▼上八八

荀子性惡の説にしたかひて、凡人性惡也といふ証拠に成へき事をかんかへ、あるへうもなき事となふる人有。これらはいふましき事なるへし。いたりてかるきことにていはゝ、小児の障子の紙をやふりまくりつるをみて、「是惡性の有所也。それ故にわるきことをする」と云なりとも、是らは親のかた大人のかたより、よしあしをたてゝいふ也。いかんとなれば、其障子、けふはり改めんとする時ならば、叱しかりいいましめめ、かへつてよく手伝をするなどいひて其まゝにすへし。小児の時、紙をやふるをよしともあし共思ふ心あらんや。無心にてする事也。新らしき障子紙なればあしき事をするといひ、古き障子紙なればよき手伝をするといふ。みな大人の方より名つくる也。虎狼の人を食するは其性にて、蚊虻かあぶの人をさし血をすふと同し。かれ是を惡しき事と思はんや。其性しかり、おのか身をやしなふ仁の類也。人よりみれば大惡不仁也。人の魚鳥を取て食するに同し。魚鳥の為に人は虎狼なり。荀子などは一人の見識より説を立て、天地より見る事あたはず。故に性善の説を得合点せさる也。

▼上八九

『太平記』などに「細馬に銜くつをかませ」といへり。余はしめ「細馬」はいか馬といふをしらす。北魏の史しに「代谷の馬は皆細馬也」といへり。猶その義をしらす。後に『推蓬寐語すいほうみご』と云書に「唐制、凡細馬次馬送さい 尚乘局しやうぜうきよく」と見えたり。しかれば、よき馬を細馬と云也。「尚乘局」、天子の御廐なり。

▼上九〇

「勘当」の文字、『続日本記』養老二年に出たり。人をいましむる事と見えたり。『源氏物語』にも「かんとう」の詞あり。又、人をとかむるを「かうじ給ひ」といへり。「勘」の字を「かう」とよめるにや。又は「考」の字か。今の世、父子師弟の間、義絶するをいふ。あやまれり。此二字もし唐律に出たるか。可考。

▼上九一

或人の云、「今の世、夜九つ時を明るはしめとするは非也。近年、曆家より此事を主張しゆちやうしていへるは、いよく非也。子の月を正月とする時ならば、子の時を日はしめとすへし。今、寅の月を正月とすれば、寅の時を今日の始とすへし」と也。さもあらんか。

▼上九二

生るものに蟻は尤微びなる物也。其はいまはる時に、互にかしらをさしあてゝ過る也。唐詩に「階蟻相逢如偶語ものいふか」と作れり。しからは、もろこしの蟻もつゆかはる事なし。

宇宙の間、唐土になきものやまとに有、大和になき、天竺てんしゆくにありもありもこそせめ。若何方にも有物ならば、其性はみな同し。蟻にて証すへし。しかし、其かたちは所によりて少しつゝのちかひはあらん。蟻にてたにあらは、性はかはらし。人に至りて、同じひとなれ共、国により其性こと也とはいふましき也。然らば、唐土の人、我国の外はみな夷狄ていきと称して禽獸同前にみなすは、天地の道をしらす、人物の性をしらぬといふへし。聖人はしからず。故に孔子は九夷に居らん共のたまへり。

▼上九三

『鳳梧隨筆ほうこ』と云書有。『鳳梧隨筆』は大江匡房作れり共いふ。覺束なし。『何人の著述といふをしらす。それに「後さか帝、龍潜たつひんの御時、六月十六日、嘉定錢十六錢をもて供御の物を買しめ玉ふ。踐祚せんその後、此例をもて嘉定会をはしめ、群臣にもちを玉ふ」と有。又云、「男子齒をそむるは鳥羽院より起ると『恵明院僧正記』に見えたり」といへり。

▼上九四

世間は元来何事もなき物也。『孟子』に「事なき所をやる智もまた大なり」といへり。たゞ小人出て事をとる故に、種々の事の生するなり。

秋税ねんくの一事に付ていはゞ、農民に「是程の地面よりは是程は上へさゝくへし。是程は其家内をやしなへ」と定るにて事すむこと也。小人出るより、上よりは多くとらんとし、下の小人よりは少く出さんとす。是より役人を置いて其姦かんをさつす。一人の耳目しもくたらされは、人を多くす。其中に又奸人ありて、つゐに賄賂行わいろはれ、上へさゝくるものはげんし、役人のこやしと成。宋の王安石か新法の弊、かくの如し。

上も下も誠の心にて事をおこなはゞ、何の障りかあらん。其処々の頭たる農民をえらひて役をとらしむへし。よくつとむ共、三五年にてあらためて、まはりにつとめさすへし。上たる人はたゞその奸は察するのみ。

▼上九五

年齒よはひをもて自らゆするも傲ごうなりと古人も老人をいましめけり。凡老境にいたりては、外見をかまはぬ心になり、髪もけつらず、衣紋も正さす、面のあかもあらはす、威義をうしなへるありさまにて、上座にのほりてはづる気なし。是よりは外見をかまはぬ心となり、つゐには「得うゑ」の一字にひかされもて行也。吾人つゝしむへし。

▼上九六

『万葉集』の歌に、「物みなはあたらしきこそよき人は誰たれ老ぬるのみそよかるへらなる」。凡万物ふるくてよきはなし。『書』の説命あつめいの篇に「人惟旧器惟新」と有。されど、徳ある人の古きは真によく社、徳なき人のふるきはわかきにおとれり。世故せこにわるかうつき欲ふかく、かた意地にくどくてきたなく、わかき者をこと／＼見下し、をのれのみ得たりとす。医者いしやは誠にかきか病功もあらんとおもへと、是もある老医のいひけるは、療治するに、年よれば心ひかれよはく、おもひ入たることのならぬもの、といへり。

▼上九七

世には父子の間に不和とはなくて、ものいひのあるか多き物也。子のかたをいましむるは勿論のこと也。おりふしは父子のかたをいましめてしかるへきあらんか。

▼上九八

月中の黒き所、地影の説、さもあらん。其さま大やう



かくの如し。南の方に黒所

なく、東北の方に多く、下、西の方へさかれり。西の方へ入ときはさかしまになるなれば、黒き所のさまもさかしまになるへきに、東より出る時并に中天の時にかはることなし。いかなる故と思ふに、遠き故也。譬は、海上をのそむに、雲は潮の中より出たる如く也。雲、ひきゝにあらず。水たかきにあらず。又、遠き故也。其わけはしりかたし。月を人の目にてみるは、物にゆく事はるかなるを、いつ迄も平行に見送る也。転する時分は人の眼力には見えず。故に西に入らんとするも、やはり平行の時也。黒所のさかしまならぬにてしるへし。

▼上九九

余か家に齋部氏の神道を伝へて、世に行はる『神代直指抄』は余か家より出たり。其原本、今にあり。先人もこのみて見給ひし。神代紀中に肝要の語は、伊弉諾尊の「めをのことはりにたかへり」とのたまへるそ、神道の奥儀といふへし、とありき。

〔以上、卷之上〕

蘭州茗話卷之下

無名氏

▼下一

『金剛經』に「^一応^二無^三所^レ住、而生^二其^三心^一」と仏の説れたり。是、衆生をして実に力を用ひて^{くろみ}仏地にいたらしむ^{をしへ}為の至教也。我を以て此句をとかせは、仏おもへらく、凡衆生の愚蒙^{おろか}につゐに邪惡にいたるは、みなよくにくらむよりをこれり。このよくは我身を我物として愛するに^{おろか}着し、妻子珍宝は我身をたすくる物故、あいして又是に^{おろか}着す。是より本心くらくなりもてゆく。色々の惡想妄念生するなり。これ住着する故なり。されはとて、人みな妻子飲食の欲をたち捨て樹下石上のすまゐをすへきにあらず。しかれば、飲食はすれとも味に着せず、妻妾は有共いろに淫せず、たゝありのまゝに心生して、ものに^{おろか}応接す。此心は真如の体よりいつる^{おろか}処なり。真如の体より出れば、邪惡にいたる事なし。是を^{おろか}執行せしめん^{おろか}為に、「一切有為法、如^レ露亦如^レ電^一」と説き、「諸行無常、是生滅法。生滅^{おろか}々已、寂滅^{おろか}為^レ樂^一」と説給へり。人、たゝ其身を有せずして死の呼吸^{おろか}のあいたに有をしるへし。真知すれば、妻子珍宝はなにゝかすへき。をのつから執着する事なし。死の呼吸のあいたにあるをしれとも、期^{おろか}する^{おろか}処なければ、その工夫おこたりやすし。是より六趣因果をとき、臨終の一念にて^{おろか}天堂にも生れ、地こくにもおつ。其一念不^{おろか}乱不^{おろか}迷の心、忽然^{おろか}と出

るにあらず。日頃着する事なき修力より生ずるなり。此所は「心仏及衆生、是三無差別」にて仏のくらゐなり。仏位なれば、来世あれば仏果を得んとなり。およそ天下の僧俗男女、みなかくの如くなれば、娑婆即寂光土なり。此教ありてより、衆生、因果報応を信して「諸悪莫作、衆善奉行」するもあり、着する所なきより見性明心して仏菩薩に至るもあり。是、釈迦一代をしへの始終なり。

扱、此二句の文法をいはく、「無所住」とは、執着する所なきなり。「而生其心」の四字、至妙なり。心は真如の実体、火はあつく、水は冷に、柳はみとりに、花は紅なるところ、ことはに落ぬところ也。「而生」の二字にて人の工夫を示したり。是は上の「応」の字にて明らか也。誠に名文といふへし。後世、禪家の解は、大やう二句ともに本来面目の様子とす。みめうにして面白くはあれと、仏の本旨には相違せり。且この文理にかなはず。此二句の上に「不応住色生心、不応住声香味触法生心」の二句あり。合せみるへし。「不応」と「応」との字に心を付へし。釈迦、諸々の方便、諸の経説、みな此事なり。

吾聖人の道に、「无妄」は天以動也。人為をましへず、自然に随ふなり。此心を「無為にして治む」とも説、「無レ可無二不可」とも「適もなく莫もなし」とも説、「無レ思也、无レ為、寂然不動、感而遂通天下之故」とも説り。此一理にありては、釈迦の意もこれに外なる事なし。昔、柳子厚か仏道をこのめるを、韓退之そしりければ、子厚、人に書をあたへていひ分しけるには、「仏説は易論語と合り。よりて好む」といへり。かゝる所を見付たるならん。されど、この子厚か論、聞えたりとも見えず。いかんとなれば、仏道は聖人の道にことにして、且まされるとなれば、好むましきにあらず。すてに聖人の道に同じからは、好むに及はぬことならずや。子厚、もろこしの地に生れて、堯舜周孔の道を学んで身を立、家をなせり。皆聖人の恩沢也。外の道には及はぬ事なり。あいもかはらぬ道なるに、すき好みて人のとかめを得るは、畢竟、異を好み、物すきといふものにて、遁辞也。天竺はもろこしの人のいはゆる西戎なれとも、人倫のくに也。その国に生れて仏と尊ぶ釈迦なれば、其説ところ、堯舜周孔の説に同じき所あるは、いふに及はぬ事にて、驚にたらず。子厚か論をたとへいはく、わか家の茶飯にかはらぬ隣家の茶飯をこのみてもらひ食ふ也。物好といはんや。且、人間は多事をいむなり。事すくなければ、心やすし。事多ければ、心わすらはし。煩しきは理にもとるのもとい也。子厚も聖人の道にてすむことなれば、それにてすませたるをよしとす。同じさまなる外国の法を学ば、屋根の上に屋根をふくか如し。もし道をしらぬ国、道をしらぬ人にて、たま／＼仏法にあひ、其教にしたかひて、「応無所住而生其心」の地に至らは、賢人といふへし。

▼下二

むかし朝廷にて『日本記』を講せられける、その終に饗宴あり。代々の天子を題にとりて、その功德を頌賛^{せうさん}したてまつる事あり。今、その歌のこれり。是を日本記竟宴和歌といふ。其内に、

得^二大鷦鷯^一天皇^ヲ

右大臣從二位兼行左近衛大将藤原朝臣時平

たかとのにのほりてみればあめのしたよみにけふりて今そとみぬる

又、『新古今集』賀の部に、仁徳天皇御製とて、

たかきやにのほりてみれば烟たつ民のかまとはにきはひにけり

僧契沖いふ、「是は往古の歌のすかたにあらねは、元慶の竟宴に此帝を得たてまつりて、誰人そのよみたる成へし。《元慶六年八月、設^二日本記竟宴^一。抄^二出^レ日本記中聖德帝王有^レ名請^二臣^一、分^テ充^下太政大臣以下預宴席^ニ六位以上^上、各作^二和歌^一。自余^ハ当日探^レ史^ヲ而作^レ之。《朗詠集》には刺史の歌とす。刺史は国の守なれば、もはら此うたの心あるへき故に、意を得てつくれるなるへし。もし又、この歌は延喜の竟宴に藤原左大臣のよみ給へるうたのかくあらたまりたるか。大かた似たる歌なり」といへり。ある人、『大成経^{たいせい}』の内の部に、『新古今』のとほりにしるして、すなはち仁徳帝の御製とあるを信するあり。誤と云へし。元より『大成経』の偽書たるも明らかなり。

▼下三

老莊は無為に着す。禪家は着せさるに着す。孔子は着すへければ着し、着すましかれば着せず。

▼下四

王制に市中にて売らぬ物数十種あり。みなくゆへあること也。大坂にて二三十年已前より、茶の引たるを売初たり。茶事は主人みつから事をとるを礼とす。茶もみつからひきて用ゆるこそよけれ。価たに出せは、何時も引茶あるは大に道を失へり。たとひ自らひき用る人あるも、買とりたるならんと客のおもはし詮なしと思ひ、いよく自せぬ勢となる。

又、諸所の煎茶の名あるをもあつめて売るものあり。もとめかたきをほり求て用るこそ楽なれ、賓客^{ひんきやく}のもてなしなれ。是みな世のいとなみのくるしく成行より種々のことに心を用ひて、人のせぬ商ひをして利を得んとする也。

▼下五

道仙といへるは至て碁の上手なり。堺にて人々碁をうちける、道仙もなかめりたり。其後、其時の碁にまけし人、道仙にあひて、「先日の碁、さきよりかく打たる時にかくあひしらひなは、勝となるへきと思ひ侍る。いかゝ」と問しに、道仙いふ、「自分の打碁ならねは、よしあしは見えぬ物に候へは、いかゝあらんもしらす」と答けりとなん。

世には「わき目八もく」といひ、もろこしにても「当むかへは局則迷旁觀瞭然ばんに」といへり。是みな下手の上の事なり。道仙程の上手にいたれば、わか碁にあらされは精神専らならぬ故に精微くはしきの所は見えぬ成へし。道仙程ありて名言を申出せり。

▼下六

日下くさか何某といひし朝鮮流の馬のりのありし。人ありて「馬にのる」と申たりしを聞て、顔打しかめて、「馬をのる」とこそ申へけれ。「馬にのる」といふことはなき事」と申き。

▼下七

人の長寿を祝しよろこふは礼なり。みつから長寿をねかひ賀筵ふるまひをまうくるなどは、このましからす。をのれ長寿なりとて世に何ほどの益がある。又をのれ死しても、子孫あれば長寿と云へし。不幸にして子孫なくは、世に人おければ、猶おのれか如し。又、長寿をいとふにもあらず。畢竟あなた次第也。

▼下八

楠河州の帝にそうせることはに、「正成死さる内うちは必聖運うちひらかるへし」となり。此ことは、北条のみにかきらす、足利氏、異国の時も其心ならん。

湊川戦死の事、河州をひき過る論あり。宮方つみに勝利なきをさとりて、わざと自殺せるとなり。是、河州の本心にたかへり。然らば、俗にいふすてはちのたくひ也。名将はさにあらず。このとき、廟かみのはかりこと策よからず、諸方の官兵敗績はいせきしてのかれかたし。恥辱の死をせんよりはと思ひての死也。且、河舟は帷幄いあくにはかりことをめくらし、臨機応変はあまりありても、短兵野戦ひらはのたいかひは長する処にあるまし。のかるゝ道あらは、なんそ君を捨、其身をほしひまゝにせんや。野史のとく処、信するにたらず。

▼下九

漢の宣帝のみことのりに、「郎官に出て百里にさいたり。われと天下をともしするは二千石なり」とあり。天下のまつりことに心をよせ給ふ君はかくこそあるへけれ。日本、中ころ、国の守を「ずりやう」といひて、はなはたいやしめり。いやしめらるれと、其身は

とみさかえたり。是より上の権下に移りたり。

▼下一〇

大海のほとりにすむ糠蝦ぬかあびは池沼をわらひ、空中をとふ蚊蠅かはいは樊籠にはこを笑ふ。いけぬま・樊籠、ひろきにはあらねと、ぬかゑひ・蚊蠅の為にはひろし。諸子の大言をこのむ、此たくひなり。

▼下一一

隣家に夜飲し、夜ふけて衆客散あいきやくさんするに、とをきに帰る人はさそみちのほとくるしからん。我ははやくねやに入りていぬれば、こゝろよく覚ゆる也。又、遠方の夜飲やいんおそくかへるとき、主人、又は隣家の人は、酒食にあきて直にふさはあしからん。我は道の遠きゆへ、酒もやゝさめ、食もやゝこなれてよしとおもふ。是は極てちいさき事なり。かく佗ほかの事に心を用ひは、その所々に応して自得の場あらん。

▼下一二

ある人のいふ、薩摩の国は新田をひらく事、昔よりなしとなり。その昔、文之ぶんしといへる人あり。さつまにて新田のさたおこりし時、この文之ひとり同心せずしていふ。「新田より米いつれば、古田にてそれ程米の出来不足するなり。然れば、多くの金銀人夫をついやして新田つきたてんは、国の利ならず」といひし也。是、尤の事とて、国乃掟おきてとなり、長く新田のさたなし。

いたれるかな、文之のいへる事。『孟子』に、草萊さうらいをひらき、土地に任するをいましめたり。文之は朱注の四書にはしめて仮名つけたる人なり。是によれば、新街まちをはしむれば古まちおとろへ、新寺たつれば古寺さひしく、新参を寵すれば古参うらむ勢しかり。

▼下一三

世上菜蔬やさいの類、其時に先たちて用るをこのむ故、商人利を得んとていろ／＼にいとなむ。これみな奢侈おこりよりをこれり。われ人いましむへし。漢、安帝のみことのりに曰、「凡供そんぐ薦新味すいむはつもの、多非せつに其節せつに。或鬱むり養強熟、或穿ほり掘萌芽たじわかほへ。味無所至、而大に折二生長二を」と見えたるは、唐土のいにしへもかくの如くなりけり。「大に生長をくしく」とは、天地生物の気をそこなふの心にて、道理をおしていへり。是より先華奢おこりの風を長するをいましむへし。おほやけには物ことに定りの時節ありて、みたりに早きは用ひたまはずとぞ。

▼下一四

しのふすりのこと、奥州にその石として今にありといふ。おそらくは「かたをなみ」の類なるへし。「すり」とは今も絹布を染るにそのかたを置いて色をすり付るなり。今いふ「はく」のこと也。「しのふすり」とは信夫郡染といふ事なり。今の加賀染の如し。その模様、朝廷の服色造染の定制にはあらて、しなくに乱にそむるより、「みたるゝ」の縁語有。「もし」といふは今の戻子なり。たての糸をもしりたる也。狩衣などに用れは褌の服なるへし。石ありてそれにすり付るといふは無稽の説なり。

▼下一五

「おる」といふ詞は「かさぬる」「たゝむ」の心なり。弓の勝負に今も「おりて参らん」といふは、おすりならば二おすりなり。狂言のことはに「みなしろおつて一重ね」といふも同じ。

▼下一六

昔百済国の人、人参を女直国にもちゆき、「此薬は大病を治し、人の死を救ふ」といひてあきなひけり。女直の人は人参といふ名をしられは、やかてとりてみて、「是は我国にも多くあり。是よりよきもあり。たとひ功能すくれたりとも、天の御あてかひなれば、其国きりにて事たるへし。他国の物を用るに及はす。いはんや我国の人参まされるをや」とて買さりけりとなん。

宋の文帝、仏法に帰して太平をいたさん事いかゝと群臣に尋られけるに、何尚之こたへて云、「仏家五戒をたもつ。是太平をいたすの道、即仁義礼智信なり」といふ。

是をたとはゝ、女直国の人、わか国の人参を捨て百済の人参を用るかことし。文帝の天下を治られし、仁義礼智信にかなふへくあらねは、いかんそ五戒をたもつ事を得ん。

▼下一七

京師に何某といふ医者ありけり。医は「巫医楽師」又は「医卜百工」などひとつにいふをにくみ、「我は儒中の医なり」と称しける由也。然らば、世間の医は儒中にあらずともへるなり。およそ世間に飯をくひ、衣を着、屋下に住、人に交り、世をわたる物は、其業はともあれ、皆儒中の人なり。僧の人倫をたつといへ共、人倫によらされは世にすまれます。所詮『遺教経』のおきてのことくは行はれず。しかれば、是も又儒中の人なり。しかれば、何某の儒とおもへるは、俗にいふ「物しり」「物よみ」、詩文を業として門戸を立てるをいふなり。

▼下一八

今の世人、家に不孝子とておほやけに申あけてかんとうするに及ふは、おほく色を好み、花柳に放蕩するよりをこれり。この心たにあらたまらは、かんとうには至らず。然れば、させる不孝にあらず。此外に一種の不孝子あり。色にまよふにあらず。勘当するにあらず。常に世をたのしくわたるへき父母をしてうれへしめ、よにあしきなく思はしむ、この罪、かへりて深し。是、いかなる所より起るとみるに、をのれか智恵をもて親にさけくらへ、おのれ勝れりと思ふよりなり。此心、かへりて改りかたくて、しかも年のよるに随て増長するや、さきの不孝は陽症の不孝にて治しやすし。後の不孝は陰症の不孝にて治しかたし。是を治せんとあらは、其子、おのれか智恵も父母のうみあたへたる也とおもは、すこしはあらたまるへし。

▼下一九

昔、吐谷渾国のあるしに阿柴といへるありけり。五十人の子をもてり。臨終に皆よひよせて、箭を五十一すちとり、一すちつゝ子にわたし、みづから一すちもち、上坐の子にあたへて、手にておらしむに、おれたり。諸子のもてる箭、みなくとりて、ひとつにおらしむるに、おれす。諸子に伝へておらしむるに、何れもおる事あたはず。この時、阿柴いふ、「国家をたもつも此ことほりなり。汝ら一人つゝわかるれば、人にほろほさる。五十人一致すれば国さかゆるなり。なんぢら兄弟みなくむつましくせよ」と遺言せり。道理をよくたとへたり。然れども、猶本をしらす。上に阿柴といふよき親あればこそ五十人の子皆々一致す。阿柴死して後、五十人をひとつにする程の人、其内になくは事とゝのほらす。其頭となりて五十人をすふるは、徳と才とに有。阿柴も是をおもは、其教育有へきなり。聖人の法には胄子を教るの道あり。後世、英傑の主なきにあらず。みな功利のならばしに染て、この一路をかく。其法は賢者をゑらひて師伝とするにあり。賢者、上さまになければ、下より上へし。下よりあくれは、権なきゆへ、人服せず。およそ唐大和、人主の国をひらき給ふを見るに、人才多く下よりあけ用ひ給へり。後世に至りては勢のあたはぬより、家からにて用ひらるゝなり。しかる時は、猶以て人才を成就するのしかた有へき事なり。しからは、多き士大夫貴人の内には、いくらか賢者出来へきなり。

▼下二〇

雪あられふり、いとさむきにしのひたへて、窓をひらきなめしまゝ、西行法師の「世は捨つ身はなき物と思へとも雪のふる日は寒くこそあれ」といへる歌をうちすして、この

法師の真率^{ありて}なるを愛し、酒あたゝめて給^{たう}ける。天地も又風流にて、かく草木にしられぬ花をさかせ、水にしられぬたまをならへ、庭にしられぬ珠をしき、又稍酒さかなのそなへもありて、貧富に応^{こた}じて形氣^{けいき}の娛^{たのしみ}もあり。いはんやひしりの心のたのしみいかはかりと思ふに、この法師は何をくるしみて世を捨て身をなき物と思ひなすや。仏道に入らへは殊勝にはあれと、かくおもはすともありなんかし。郝敬山^{かくけいさん}がつくれる『時習新知』といふ書に云、「浮屠、世界を以て苦とし、樂をあはせて又是を苦といふ。時俗^{ぼんぷ}は世にあるを以て樂とし、苦を合せて又是を樂といふ。唯ひしりは其まさにたのしむべき所をたのしみ、そのまさにうれふべき所を憂ふ」といへり。

▼下二一

「祓」の字、『周礼』春官の職に「女巫^{じよふつ}掌^{つかさど}三歲時祓除釁浴^を」。注に「如今^下の三月上巳如^二水上^一之類^上」とあり。鬼神につけて災を除き福を求むる也。文字、「示」にしたかふなり。「示」は音岐にて「祇^き」と同じ。鬼神にかゝることには「示」の字を用ゆる也。俗に禾^{のき}篇に作る。字の似たるによりて誤るなり。巫祝家^{しんたうじや}、是に付会^{つけこ}し、「日本は稲のよき国ゆへ、禾篇にしたかふなり。故実なり」といふ。それ不祥をはらひ除くに稲のよきはあすからず。非にしたかひ、あやまちをかさる、かくの如きあり。

▼下二二

人に「かたぎ」といふ事あり。「形氣^{かたき}」とかくか。又は「荷擔氣^{かたぎ}」と書へきか。畢竟『左伝』にいへる「客氣」のことなるへし。唯死人のみかたぎなし。又、かたぎあるによりて賢者と称するもあらん。柔善^{じうぜん}の人にはまたかたぎなし。

▼下二三

昔若年の時、『太平記』の注を見侍りし。坊門の宰相と楠河州といくさ評定の時、宰相ことの外声色あらく見えし時、河洲もすこし怒見えたり。河州、一生に怒のありしは、たゞ此時なり。すへて怒はこらすへき事なり。人のいかるに、われもいかれは、人の怒のまねをする也といへり。古の君子、怒をこらすの戒はあまた見えたり。然るに、この人まねをするといへるはよく云とりたり。少年の時なれとも、この一言を佩服^{はいふく}せり。こと／＼くしかることあたはすといへ共、思ひ出れは怒火^{いかり}をしめすの良方也。意を得て書を見は、しやうるり・くさそうしも人の益となるへき也。

▼下二四

本郷あたりの大家の臣に小野姓^{うじ}の兄弟あり。弟は名を良器^{りうき}といひてすこし学問せり。兄は休円とて豪氣物^{けんきもの}にして書をもよます。其子、又豪氣にして孝順ならず。弟、是をうれひて読書などすゝめけり。或時、兄の云、「教といふ事、異見といふ事、かつて用にたゝぬ物なり。我に金をすへふる桶にひとつもたせなは、我子も孝順となり、都て人を善人とすへきなり」といふ。

是、元より戯なから、座興にいひし事なれば、とり上て論するにたらず。されと、世の功利富貴によたれをなかつ人は、かゝる事を聞てよろこひ思ふ也。教の用をなさぬは、大やうしかり。然るに、是は「童牛の牯^{こく}」「償豕^{しんし}の牙^{きは}」といふ術をしらすして、長大剛強になりて後に、教を以てため直さんとする也。用をなさぬもことはりなり。此論はさし置ぬ。金をあたへよろこはして人を道ひかんとせは、先此方に金を貯ふる手段をする歟。かならず人をあさむき、人の利をかすめとり、賄賂^{まいた}をむさほる人となるへし。しからは、人を善にする迄もなく、其身に禍害^{わざはひ}あらん。是も又行はれぬ事なればまだしも、教異見するかあたりまへなり。買たる魚にふるきありて、用にたゝぬ事あれと、魚を求めるは、いつとても魚屋にありといふ類也。

▼下二五

兵器は皆陰に属す。唯弓矢のみ陽器也。

古人、繁藤^{はんとう}の弓の説に、「握の上に三十六の藤^{とう}を用ゆ。是、地の三十六禽^{さん}なり。握の下に二十八の藤^{とう}を用ゆ。是、天の二十八宿なり。上なる物を下に置、下なる物を上におく。是、地天泰の卦なり。上筭^{はづ}の長きは、からすの口はしにて日なり。下筭の短きは、兎にて月也」といふ。

われ、又是に説をつけて、三十六は四九三十六にて大陽の数也。二十八は四七二十八にて少陽の数。上下を合して六十四、即六十四卦の象なり。四季の藤^{とう}を用るは四象のすかた也。其外付会すれば皆よくかなへり。かゝる理を含む器^{とぐぐ}は外にあらし。むへなる哉。聖人、易にありて睽^{けい}の卦の象として天地の功用をしめし給へり。日本にて弓矢の徳を昔より他に異に申伝ふるもゆへあることならし。

▼下二六

天地の間、万物あり。人は用るは其物につきて其固有^{こもつ}する所を用るなり。至りて小さき事にてたとへていはし、今の世人の用る腰のさけものにねつけといふ物あり。是にはちいさき瓢を用ゆ。自然の姿なり。煙草あれば必きせるあり。このきせるには竹のらう尤よろし。近頃はわさと木に孔^{あな}をとをし、外をまるくけつり漆などぬり用る也。大にひかことな

り。竹は自然と孔ありて外には皮あり。垢あかつく事なし。是を捨て木を用ゆ、笑ふへし。凡夫のするさま、此類多し。

▼下二七

高雄の鐘は三絶ぜつといふ。ある人のいへらく、およそ世の事二絶なれは多くはよし。かならず三絶なるへきは、謡曲は声よくふしよきも、拍子をしらされは全からず。弓芸は力つよくあたりもすれと、かたち正しからされはそなはらず。人は才あり芸あれと、徳なければよみするにたらず。

▼下二八

もろこしの人、日本の繭紙けんしを用て書するといふ事見えたり。繭紙はわか国にていかなる紙といふをしらず。『玄巖詩話』を見侍しに、「以朝鮮厚繭紙作鯉魚函」といふ事見えたり。朝鮮の紙に日本のとりの子紙のときあり。紙の風はむらありていやし。然れは、繭紙はとりの子紙成へし。とりの子のよきをきずきといふ。土気のなきなり。蠟ろうを引うちすかして蠟地とりの子といふ也。よりて思ふに、古のとりの子紙は蚕のまゆにてつくりける歟。もろこしの紙にも綿料紙といふは綿にてつくとなり。とりの子といふは紙の色鶏卵の壳からのいろのときゆへなるへし。

▼下二九

文貝あをかいの器はもろこしを尊む。琉球は極て精緻こまかなれとも古雅ならず。宋の方句はういんか『泊宅編』に「螺填器あをかいはもと我国よりはしまる。万物の象を精しくたくみ出す。今の世の市に集る類にあらず」といへり。しかれは、今もろこし細工とて調法する古き青貝器は、かへりて日本細工ならんもしらず。

▼下三〇

日本人のかける虎の画はもろこしを見てうつすならん。いつれもたけきさまなり。享保の初年に南蛮なんばんより象けんを貢しけり。諸人あまねく真象を見て、これ迄の象の図のよからぬをしる。「虎の行は如病、鷹の立は如眠」とあれは、虎もたけくかくは誤ならん。

▼下三一

近年から流の絵をかく事、世にはやれり。茅一相ぼうしやうか『絵妙』に「古人、画藁粉本えのしたかきまをといふ。その艸々あらくと意を経さる所に自然の妙あり」といへり。粉本は今の絵本なり。すへて

宋の画を見るに、筆あらく丹青を少く用ひて淡薄也。明にいたりての画はおほく精微にてうつくしくいとれり。是、伝模移写の画にて氣韻骨法の妙なし。日本にていはゞ、素人絵細工絵の如し。狩野家の画はこの草々たる所を学ひて、麁に失したりと見ゆ。今唐の絵とたにいへはよしとおもひてうつしならふは看場の見なり。

▼下三二

『事物紀原』に喪葬に用る器をいひつらねて「周公始為華表」とあり。墓有所のしるし成へし。是を日本にて神祠のとりめとするはあやまりなり。とりめは上古の門の象なるへし。

▼下三三

顯宗天皇二年に「稻斛銀錢一文」とあり。清和天皇貞觀八年に「白米一斛七貫二百文、黒米四貫百文」とあり。是は銅錢なるへし。この米価の貴賤まことに雲泥のちかひなり。其上、貞觀錢の位、今時よりは貴かるへし。然れば、後世ともかゝる事はなきなり。いかなる故と考えるに、遊手閑氏多くなり、五穀は年々に少く、不幸にして旱潦にあへば、すなはち食にともしきゆへなり。

▼下三四

昔一城の主、取稼の巧者なるものをめし置給へり。其人、ある時、農人ともを召あつめて、納かたの貢数を申渡しけり。例にかはりて多ければ、農人とも承引せず。其人申けるには、「其方ともは元來農人百姓の体をしらするより左は思ふ也。農人は身にさしこといふ物を着し、繩の帶をし、わらにて髪をたはね、しるねのはたき粉にぬかをませ、たんこにこしらへ、菜大根をきりこみて、ざうすいをして食し、家は松の柱をほり込み、屋根はむきわらにてふき、ねこたといふ物をしき物にし、雨にも雪にも寒にも暑にも、田畠に居るへし。かくすれば、物もいらす米もよく出来て十分に上へも納めらるゝなり。今、汝らのありさまを見れば、よき木綿をものすきにそめてすそ長に着し、外へ出るには絹ものを着、さやの帶、つむぎの羽織、金らんのたはこ入、ねつみや張のきせる、羅沙のきせる筒、京もとゆひをまき立、ひけか油をぬり立、食物は常に米のめし也。しまつといふか麦飯なり。家には青たゝみをしき、瓦ふきに物すきのすまゐをし、高をもてるものは耕作は下人下作につくらせ、其身茶の湯まりうたひを稽古し、京大坂へなくさみ出るなり。見るをみまねに水吞百姓下作つくり下男迄、百姓のもやうはなり、此通りにては、作り出す米をみな／＼おのれか物にしても次第にひんほし、後々はわらふきの下にも得居るまし。先に

いふ通り心得は、定りの通りに上へ納て、家にもよけいあらん。上よりあれば有たけにはきとらんとし給はす。今、汝らを一たひわらふて髪をゆはせねは、国の御為にならず、汝らか為にもならず。是をよく心得は、わかいふ処の無理ならざるをしるへし」といへりとそ。

是を旁より見れば、先一々尤なり。世、大平に治まれば、をのつから華美になるは上下ともに勢のしからしむ所なり。然るに、此おこりをする農人は、一村の内に十人もなし。この物とも、耕作はかりにてはこの奢はならず。面々商人にましりて商の利を得るよりなり。都会にちかき百姓は猶以しかり。水呑百姓も見るをみまねに奢りて、つなぬきといふ革のはき物をはきて畠かへすなど見及へり。昔よりは耕作も巧者になりて、地より出る物も多し。然れば、くらしかたの見よくなることもはりなり。是等をいかりいましめて乞食同前のさまになれとは、先は仁君の心にはあらざるへし。仁徳天皇のみことのりにも「百姓の富るは即朕か富るなり」とありしにくらふれば、へたてあり。一二人めしつかふ下人にも、あまり見くるしきさまなれば、主人心よからず。まして其国一年の納りは昔にかはらねと、おこりの世の勢なれば、国用は一倍の費あり。この一倍の入用をつかはんとて、百姓の商ひして利をとり自由をする料物を皆上へ納めよ、小百姓の巧者になりて、とり実多くなり、つなぬきかはん料物を皆上へ納めよといは、百姓の心服せぬもすこしはことほりある歟。

▼下三五

「くはたつる」とは「跂」の字にて、足をつまたつるなり。「むさほる」とは「貪」の字にて、むさく欲するなり。「あし」を「くは」といひ、「きたなき」を「むさき」といふは雅語なるにや。いにしへのことは未たきかす。人をかるんするを今の人「なめ」といふ。すてに『万葉』にも『源氏』にもいへり。

▼下三六

およそ悪臭は陰氣のしからしむるなり。好臭は陽氣のしからしむるなり。人死しもの朽れはくさし。香なきものも火にやけはよき匂ひ出る也。

▼下三七

聖武帝の御時、下道真備へ後に吉備とあらたむ、唐より帰り、唐礼百三十卷、大衍曆、樂書などを献してより、日本の礼樂制度みな唐にならひ給へり。仁明帝の詔りに「天下儀式男女の衣服みな唐様を用ひ、五位已上の位記唐の法にしたかふ」との給へり。貞観年中、

阿部高隆の議文にも「本朝制度多擬^{なづか}唐家^{たうか}」といへり。此時唐朝に行はるゝ事を伝聞し給ふと、かならず礼をあらため給へり。をしひ哉、三代の礼にならひ給はぬ故、大礼にいさゝか^{けつてん}缺典あり。

▼下三八

ある人とふ、「人の^{うまれつき}性は善なりとうけ給はる。いかなれば世に悪人あるや」。「習よりなり」。「そのならひはいつくより来るや」。「世の人よりうくるなり」。「その世の人の習はいつくより来る」。「是亦人よりうくるなり」。「しからは、性中に元来悪ある故、其あしきならひの出来るなり」と。われ答て云、「よくも問つめ給ひたれ。物語の長きを退屈せず、よく聞給へ。人の性はたゞ性也。善もなく悪もなし。たゞ善をすへき種の有なり。是をたしかに見付て、孟子の性善の説をはしめ給へり。荀子^{しゆんしこく}告子のともからのしる処にあらず。さて其ならひはいつくより来るそといふに、やはり善より来る。『礼記』に「礼は飲食より始まる」と見えたり。この礼は制度^{しかた}文為^{かきり}の礼なれば、聖人のこしらへ給へるなり。あまねくいはゞ、人の悪心は飲食よりはしまると云へし。いかんとなれば、小児二三歳の時のよくは食物のみなり。この時より後は、食物の側^{そば}にあるをみれば、やかてとりて食ふ。是ぬすむといふ心にはあらず。唯欲するまゝの心なり。父母是を見て、食の過^{あやま}ん事をうれへてしかりいましむ。猶とり食すれば、或はうち、又はつめりする也。この後、とりて食せんとする時は、かならず父母のかほを見て、あるひはやめ、又とりてはやくかくす。是を又つよくいましむれば、それより父母の見ぬ時にいましめんとする心出来るなり。扱、其食物の見ぬ時に「いかゞ」と問は、とり食しても「しらす」といふ。是悪のはしめ也。其初はたゞ食たきまゝにとり食たるか、いろ／＼となりもて行は、到頭^{とうとう}ぬすみいつはりの心をこしらへなす也。是を習ひと云也。至てかしこく生れ付し小児はとり食はんとするの心は同じけれど、父母のいましめ給ふは我をあはれみ給ふ故なりと子心におもひて、みたりにとらす。おろかに生れつきたるは其心なく、くひたきまゝにいましめをわするゝなり。かくしとるはぬすむに同じといふ事をいまたしらねと、いかりをおそれてかくすこゝろ出来るなり。相ともなふ小児、いつれもかくのことし。是とたかひに朝夕なれ又めのとかしつきなど、皆々この内より成長したる物にて、是と相したしひて、つゝに盗竊^{とうせつ}詐偽^{さぎ}の人となる。始め性をうくるとき、盗竊詐偽の心はかつてなき事なり。此かくしてとりくひくらひても食はぬといふ心、かしこき児ははやくあしきと心得て増長せず。おろかなる小児は其心出来ず。それなりに成人したるものか悪人となる事なり。是、習によりて同じ小児なれとも大に善悪のわかち出来る也。韓退之は不吟味なる儒者にて、『左氏伝』のうそはなしをまことと心得て三品の説を立られたり。性は善にして大小^{せうれつ}優劣^{ゆうれつ}のたかひありといふ

事をしらするなり。其大小優劣をいはし、人ことにたかひありて其面の如し。是、余か父人の説にて、今是を敷演するのみ。
しきのふる

▼下三九

或処に投入花の会といふ事をせし時、宗匠の花をひとりか見て、「同し手にてさす事なるに、宗匠の花は格別なり」と申けり。ひとりか云は、「手にてさすと思へるよりよからす」とたはむれて、「花は目にてさす」といふ。宗匠いふ、「花は手にてもさす、目にてもさす。心にてさす」といへり。みな尤と申ける時、側に少人のありけるか申は、「花は花にて、さすものにてはなきや」と申ければ、笑になりけり。我思ふに、宗匠のいへるは高上なるに似ておもしろからず。少人のいへる所、至極せり。花は花によりて其やうの出来る事也。其物に付て用をなすは天地聖人のこゝろなり。

▼下四〇

「富貴は貧賤にしかすとは矯激の論なり」と謝在抗(杭)いへり。さもあらん。しかるに、謝在抗(杭)は貴性の人なれば、貧賤なる家にはあらし。貧賤なる人の胸中ためすきはしらするへし。およそ樂に二の品あり。心のたのしみは聖人分上の事にて至りかたけれど、性ある人なれば得ことなきにしもあらず。形のたのしみは富貴の所作にて得やすきかことくなれと、命ある人なれば、かならず得へしとしかたし。世の人、富貴に処しよする道あるをしらすして富貴なる故、常々に氣のほりしてあられぬ事をする也。貧賤に処きする道あるをしらすして貧賤なる故、常々にくるしみて又あられぬ事をするなり。然れば、ふたつに処する道をしりたらん人は、富貴は貧賤にしかすの証はいふましき也。謝在抗(杭)はさせる君子共見えねは、この矯激の論ともしれるも聾者つんほうの五音を弁つるか如し。又世の人、居所飲食の富貴のたのしみをせんとて心のくるしみをなすはいかなる故といふをしらす。

▼下四一

『梁塵秘抄』りやうちんひしやう 神樂歌に「四方山の人の守りにする鉾を神のみ前にいはひつるかな」とあり。此四方山は四方の山といふにてはなく、たゞ四方なり。此ことは今に残りて、「四方山のはなしする」といふ也。たゞ世上のはなしものかたりをする也。唐の俗語に江湖かうこの詞あり。江と湖とはあらず。又たゞ世上といふ心なり。和漢よく似たる事あるもの也。

▼下四二

ある人の申けるは、「およそ人の親たる物、子をもたんとては、いろ／＼に心も身もく

ろうして、やうやうに懷妊するならば、子たる物の心に、親の御恩をよく知りて孝行なるへし。さにはあらず、わかき夫婦はとりわき子孫相続などいふに心なく、たゞ情欲のまゝにてまうけたれば、不肖なる子は、親のなくさみより生れたれば恩にきる事なしとおもひて、不孝をする也。この所は造化もすこし御氣のつかさるならん」とたはむれながら申けり。余おもふに、其御氣のつかさるか則天道広大の御恩也。その説の如くならば、世間の人、子一人二人あらは、もはや此上はよしなしとて、出生をやめん。其子もし夭死せは、其家は絶る也。かくあらは、天地の間に人は次第く減し、生々の道理なく、終には鳥獸のみはひこらん。賢愚貧富のわかちもなく、礼非礼の替りめもなく、男女まじはりたにあれば出生す。是こそ生々の理といふべき也。聖人、是を裁成輔相して、婚姻の礼、男女の別を立。貴賤によりて妻妾の数を定め、親戚相通するを禁して、父子の倫、とのほる也。年々水害ありて民物損亡すれども、地有は海河はなくてかなはず。不肖子ありとても、子孫の生育は父母の情欲より出さらんや。

▼下四三

風はひとつなり。網の目に風とまるといひ、針程のあなより棒程の風きたるといふ。手は一つなり。下よりあくれば人をはらふ也。上よりおろせば人をまねく也。頭は一つなり。たてに動せはうけやう也。横にうこかせはいなむ也。万事皆われよりする也。先の物をとかむへからず。

▼下四四

狂気する者、甚あらくて牢にも入へき程ならば、居風呂の桶の釜をぬぎ、さかさまにふせて、其うちへおし入、上におもしの石を置き、釜の孔より食ものを入へし。かくすれば、はやく治する也。其まゝに置いて、人々あつまり、とらへつかへつすれば、いよゝあらくなる也。すへて狂人をいたはるは、かへりて害となる。もろくの家にてわたくしに牢をこしらゆるは法禁なり。又官に訴るははつらはし。此法よき方なり。

▼下四五

百年已前、人の学問しける様子を伝へ聞に、先素読し、大かい四書をよみ覚え、扱四書の講釈をきゝ、つとめて聞書といふ事をし、字面をすまし、それより末書を見てひとり心得、扱五経にわたり、おもしろき心生し、是よりは無点の書をよみ、つゝに古書を見て解するに至れる也。人もうらやみて世に学問の行はれける也。近頃の学問は古文辞といふ事を聞ならひて、また四書もおほへす、点付の書物も解する事のならぬに、はや唐本くるひ

をし出し、「漢魏已後の書は目にふれぬ」など高それなる事をいひならふ也。畢竟、書を見てもよめず、合点もゆかぬを、合点のゆきたる様にもてなしたれば、面白き心は出来ず。唯世をあさむく為に学問中間に入居るなり。老人長者の篤実なる心よりは甚きらふ事なれば、書物くるひは無用の事と子や弟やを制しとむるや。其身も元よりおもしろからねは、やかて書物見せをとり置也。是より少々覚えたる事やまひと成て、放蕩不行跡のかさりとなる。ゆく／＼は世間には学問といふ事絶はつへしと見ゆるなり。

▼下四六

人を何とも思はぬを「あいそもこそなし」といふ。愛相も姑息もなきといふ事か。「いちみちんにする」といふは宋明の俗語の「一味地」といふ事か。

▼下四七

十月を「かみな月」といふ。僧契沖いふ、「この解、昔より説多し。余か思ふにはいとやすくとかるゝ也。「かみ」は神にて雷の事也。十月は雷なき月といふ事なり」といへり。此説、従ひかたし。尤歌に「神」とのみいひて雷の事になれと、一首の内に「なる」とか「聞」とか縁のことはありて、雷の事と聞ゆる也。歌にこそ雷を「かみ」とこそいへ、平生の云に「かみ」とのみいひて雷とはせず。予か家の説には、数は十にて終る、この上なしといふ心也。調子の上無の如し。

▼下四八

園に薯芋のつるの尺はかりのひたるあり。側なるたてる木の方へはひよれり。こゝろみに引のけ置に、あしたに見れば、もとのことく木のかたにより、つみに巻つきけり。是、耳目のものに移るにあらず。心智の安危をゑらむにあらず。されと、かゝるわさの自然とあり。草木すへてさはりあるかたへは枝も根もさゝす。其たねは幾重もつゝみまはしてそんせぬやうにとのそなへあり。是も又性といふものゝあれば也。仏の慈悲、むしけらには及ひたれとも、草木には及はす。しかれば、仲子の操の類にて、十分には満へからさる也。

▼下四九

陰陽拘忌、人の耳目をぬり、心智を愚にする事、唐日本しかり。諸人、是をよろこひ用て、何事もなき世界なるに、種々のことをつくり出し、多事にしなし、窮屈なり。一向宗はよくさととりて、雑行と名つけて一切にかまひなし。一見識なり。ある人、古林見宜にとふ、「灸をすゆるに禁穴忌日ありとなり。まことにしかるや」。見宜答に、「いかにもく

是あり。先は眼のうち禁穴成へし。正月元日忌日なるへし」とたはむられたり。理に達したる人といふへし。

▼下五〇

『詩経』に、周の末俗のあしきをうれへ、詩人、古をしたひて、「其容不_レ改出_レ言有_レ章」
とつくりたり。今の世、衣服より刀わきさしのこしらへ、髪のゆひやう、沓はき物に至る迄、異様なるさま也。ものいひもいやしきことのみいひわたりて、是をよしとおもへり。
下々のみならず、高貴の人までも風俗いやしくて見苦し。古今一轍なり。

▼下五一

「柚はよひ物なれと、匂ひあし」といふ人ありとたはむれいふ也。世には是に似たる
ことおほし。僧は洒落にておもしろけれど、人の道をたつはすさまじ。茶の湯者の物すきは面白けれど、かこひにて茶をのむはうるさし。神道もおもしろけれど、巫祝のさなるはむつかし。儒者もおもしろけれど、唐人風にこはすは見苦し。

▼下五二

およそ詩賦文章の二道、詩賦は情景をのふるゆへ、其事の空実は必しもせんきするに及はす。それたに左思は「三都賦」を作りて、司馬相如・揚子雲・班固・張衡か賦に、其地の産にあらざる物をのせたりとてそしりけり。宋の真宗、唐の時の酒の直段を丁謂に問給ひし時、こたへて申、「杜甫か詩に「速須相就飲_二一斗_一」、恰有_二三百_一の青銅錢」と作りたれば、一斗のあたひ三百文なり」といへり。杜詩を詩史といへるはよしある事也。三百篇にては、「周余黎民、靡_レ有_二子遺_一」「取_二彼譜人_一、投_二界豺虎_一」の類、実に過たる辞なり。其佗は誰か虚誕といはん。

このころ『万葉集』をよみしに、山上憶良の歌の詞書に「跛足之驢」といふ事見えたり。『夫木』に好忠の歌とて、「世をうさきまのうなかしそゆく」とよめり。然らば、古吾国に驢馬のありしや。土産にはあらで、唐よりわたりしや。文章はまことに実をしるすへし。それたに孟子は書の武成の中にて二三策をとるといへり。莊子の文は虚誕をおもてに出したれば、その実とはとるに及す。『左氏伝』は聖經によりて書たれど、無稽の言を信じてしるしたれば、全体虚誕をまぬかれず。信すへからざるの書也。汲家の書にいたりて誰か是を信せん。いはんや後世浅陋の儒者の文をや。

▼下五三

周亮工しゅうりやうこうか『書影』に「莆田の洪仲韋こうちゆうゐいふ、このころ極西きょせいの国の僧の金陵きんりやうに到着せしに逢て、其道すからの事をたつねしに、国のかつ二十四国を経てはしめて中国に至るといふ。其二十四国の内に中国の風俗に似たる国もありやと問ふ。いづれも悉ひすの国なれば、いかてか中国に似たる国あらん。但、この国々は中国のことくうそをつくすへをしらすといひけり。仲韋おもへらく、此うそをつく事、唐虞たうぐより已来中国行はる。しかし今時の甚しき程にはあらず」といへり。晋しんの彭淵才こうえんさい、人言を信してたまされたる時、「今より以後、孔子・老子の言の外は信すまじきことなり」といへり。さもあるへし。

▼下五四

中古以上の歌よむ人は和漢の才学あり。歌道の伝受といふ事をきかす。後世は歌道の伝受あり。和漢の才学あるはすくなし。為家卿のうたに、「しき嶋の大和にはあらぬから文の跡をまなひぬ身とはなりにき」。

▼下五五

万物の変化はみな地気のしからしむ也。其地気は大陽のしからしむるなり。其大陽は天のしからしむ也。「大塊たいくはいの噫氣おくび、其名を風といふ」とは莊子の名言なり。凡雲の動くはみな風なり。風はさのみは高くは吹ぬ物也。西北の利未亜りみあの地に、あらゝ山あたらしやまといふ山あり。天下唯此山至て高しといふ。此山にのほり、山のいたゝきに紙一枚ひらきおき、次のとし、又のほりみるに、紙少しも動かす元の如しと紅毛人のいへるよしなり。至て高きは湿気なく風気なし。雲もかゝらす雨雪もなし。然らは、紙の其まゝなるもうたかふへきにあらず。冬至一陽生つといふて、日の北に向ひ初るゆへ也。春夏秋冬、二十四節、みな日のやとりよりおこるなり。此大陽、地をてらし、土をむす。其遠辺正斜すくせいしやにて、万物の変化出来る也。

▼下五六

紅毛国の人はうまうくにのひとは、俗にいふめのご算用といふ仕方にて、理を以てをして目に見、器物を用てはかり、たしかなる事ならねは、云もせず、用ひもせず。目を尊ひて、天をいはす、仏道を信せず。およそ怪異の事をうけとらす。江戸に渡辺長祐といへる人あり。紅毛人を兩度迄長崎より江戸へつれて往来せし人にて、学問あり。天学もよ程稽古せし人なり。此人の物かたりにて聞る処也。

▼下五七

人の出家となる時は、おほやけよりゆるし給はる切手あり。度牒とてうといふ。唐の時よりはしまれり。日本にても昔は是ありし也。東涯のあめる『制度通』に日本の度牒を出されたり。左の如し。

度牒式

治部尚書

城州路東山東福禪寺童行士恩本貫係本州乙国県人事俗姓秦見ノ年十四歳投はいて礼当してたう
寺住持士雲長老じちうしじうんちやうらう為な本師ほんし、賜たまは紙度牒しどてう剃髮受具しはつじゆぐスル者

右被み大政官ノ符称しうしやう左大臣宣のたまふ奉たてまつレ

勅し件度けんど者姓しやうしやう秦宜しんぎ治部省与よ剃度しど牒てう至いたラハ准したセヨ

勅し故こ牒てう

正和貳年四月八日左大史小槻宿祢清時給

参議郎さんぎらう 兼治部郎けんしりやう從四位下行神朝臣康光

典守宰事官

鴻臚丞 從位下行藤朝臣定行

鴻臚少卿 闕

典客郎中署令 從位上平朝臣高広

治部主事 闕

治部郎中 正位上行江朝臣公経

治部侍郎しりやう 正位行源朝臣光房

右料紙、黄色の唐紙五枚重、たて一尺五寸三分、横二尺二寸五分、印三所、ともに

同し。書面の文字、大の分は板行也。小の分は位階。花押はともに墨書なり。

又、駿州有渡郡久能寺にある度牒も出されたり。煩はづらはしければ略す。二枚ともに今に寺にあると也。唐の時、人民、僧となれば賦役をゆるされ、安逸あんいにくらすにより、みたりに僧となるもの多し。是故、度牒といふこと始れり。日本にては、文武天皇大宝の令に僧尼の告牒こくたうの事見えたり。是、度牒の事也。大宝は則天皇后の時にあたり、天宝よりは数十年前なり。又、元正天皇養老四年に、天下の僧尼に公驗をさつくとあり。公驗は則度牒なり。是も天宝六年よりは二十八年前なり。すへて元明・元正二帝の御時は、僧尼の徒をおさへ給へり。ゆへにこの公驗をはしめ給ふなれば、唐の度牒にならひ給ふにてはなく、僧尼を多くせましきか為成へし。此時、芸能ある僧は、多くみことのりして還俗せしめらる。『続日本記』にて考ふへし。久能寺の度牒の年号は承久元年なれば、さのみ遠き事にあらす。

明の建文帝、都をのかれ給へる時、太祖の時よりひらかぬ箱の内に度牒と剃刀とありて、直に披剃せられたり。今の清朝にもさありと見えたり。僧祇律に天竺にても、父母国王ゆるさされはみたりに僧とならずと見えたり。

▼下五八

儒者といふひとつの門戸の立たるは、元来このましからぬ事なり。昔なき事也。孔子も魯国の臣なり。此門戸の立たるは戦国よりはしまる。その時は国々戦争の時にて、聖人の道を迂^{まはりとし}とおもひし故、孟子・荀子の徒をもちひす、たゞ崇敬するのみなり。是よりおのつから儒者といふ一かふの出来るなり。儒といふは人の道をとくなれば、農人なれば田を耕^{たかへ}し、商人なればあきなひをし、仕官の人なれば其職役をつとむるか、その本意也。書を講し詩文を作るはかりなる人を儒者とはすましき事なり。

▼下五九

人、長寿といへとも百年をすきす。子ありて相続すれば、子は父の血肉にて同じ身なり。子を生し、子を生して、いくはくの長寿を得んもはかられず。もし子なくして死すれば、生々の道、我身にて断絶すれば、たとひ百歳の寿を持ても夭死^{わかしに}也。人をして其身にて断絶せしむるは生々の道をたつ也。生々の道をたつは殺生と同じ。世の人、一夜の内にくちたる所より千万わき出る虫けら一ひきの命をたつ事を悲しみて、昔より伝り来たる人の種を断事をよしとするはいかなる故といふをしらす。

▼下六〇

国守の若君、なくさみに野辺に出給へる道に、乞食のすみかよりうつくしき猫のはしり出たるを見給ひて、近習にいひ付てとりて帰り、ことの外に愛し給ひしに、ある日、此猫ゆきかたしれすうせにけり。その後、又野辺に出給へるに、かの猫、もとの乞食のすみかの軒にふし居たると也。糞中の虫をとりて縁かはに置は、かならず厠のかたにはひ行なり。世の人、をのか分をしりてやすんすなり。

▼下六一

西北の国に、「しゆてやあ」といふ国あり。此国、開闢よりこのかた六千年つゝきて国に軍なし。真にしからは大和・唐も及はぬ事也。紅毛国も其国の内にてたかひに戦ふ事なしといへり。

按するに、「しゆてやあ」は文字は「如徳亜」也。『明史』にいはく、「如徳亜は

古の大秦国也」といへり。大秦国、一名は弘林国。

▼下六二

古人いふ、「虎はとらをくらはす。人は人をくらふ。とらは子を食はす。人は子を食ふ」となり。およそ人をおとして己さかえ、人の利を奪ふて我をこやすは人を食ふなり。いやしきもの、をのれか子をうり、価を取て身をやしなふは子を食ふなり。宋の請康の乱に、食物なくて処々に人の肉の切うりあり。犬ふたの肉より下直なり。又、干物にして売けりとなん。戦国の時、宋の樂羊はわか子のしるを三杯食して功をたてたりといへり。是は実の子を食ひ、人を食ふ。我国にてはさきのごときは多くあり。後のごときは未だ聞す。又、唐土にまされる所あり。

▼下六三

連歌家に「エ」の字を下知のことはと称して切字に用ゆ。一概にいふへからず。添終の字の「ソエ」「ヲエ」は「乞エ」「言エ」などのたくひにあらず。「添よ」「終よ」といはされは下知とならず。

▼下六四

世俗に、「若」の字を「わか」とよみて老若と用ゆる也。「若」の音、「弱」と同しければ通用せるなり。或説に、「弱」の字、草書の弱と、「若」の字の草書弱と似たり。是故書あやまるともいふ。又、土橋節齋か説に、「公侯貴人の適子を「わか君」といふ。「弱君」とかけは「よは君」とよまるゝ也。是をいみて「若」の字を用ひたる歟」といへり。此「若」の字に付て古にもとりあやまりあり。歌のごとはに、老人のわかく見ゆるを「わかかへる」といへり。『万集集』に「弱反」とかけり。「弱」の草書、又「駒」の草書弱の字に似たる故、あやまりて「こまかへる」とよみ来れり。「嬾」の字を「嫩」の字に見誤、「紫塵嫩蕨」を「ものうきわらひ」とよめるか如し。

▼下六五

もろこしの文章の中に、日本ことはらしき事のある事有。見あたりしまゝに書しるす。「九疑之南、陸事寡而水事多」〈淮南子〉、「帝王之御物」〈雲陽子〉、「太子勃、入牢視囚」〈史記五宗〉、「百年醉眠、孔思遠以臥具覆之」〈世説〉、「舍人怪之、以為物而伺之」〈史記悼惠王〉、「賓客益落」〈史記鄭當時〉、「吏士皆無人色」〈史記李広〉、「元宗、擇宿衛勇者、為番頭」〈通鑑〉、「言語寡少故、一往觀之、似不能言者也」〈皇侃論

語疏》、「去十五年〈胡三省曰、去十五年猶云昨十五年〉〈通鑑〉、「平人不病也」〈素問〉、
「新雨帶^三秋嵐」〈注嵐山風也〉「唐詩解」、「醉船^二」〈注船量也〉「袖珍方」、「勾龍佐顓
頊、能平^二水土^一為^二后土^一。故封^レ為^二上公^一、祀^テ以為^レ社」〈左伝〉、「官府^ノ文書、以^レ上臨^レ
下^ニ皆用^二仰字^一」〈群碎録〉、「數畝蒲萄^{フドウ}棚」〈袁中郎〉、「母^レ殺^二畜生^一」〈管子〉、「金勝^二木木
勝^二土^一」〈春秋繁露〉、「常^ニ用^二四脚^一碁盤」〈堯山外記〉、「太子其有^レ憂乎。非歎所也」〈左
伝〉、「世謂有病曰^二不快^一」〈華佗伝〉、「泛^二石湖^一雇^二遊山船^一」〈外記〉、「不如^二下官耳学^一」
〈上同〉、「陸鴻漸精^二茶理^一」〈上同〉、「皮光業最^モ耽^二茶事^一」〈上同〉、「地主」〈左伝〉、「視^二
手理^一」〈韓非子〉、「乖崖之名聊以表德」〈外記〉、「毛人数百、出^レ堞投^レ水。蓋城之精也」
〈輟耕〉、「茶頃^{のしほ}」〈上同〉、「視^二人如^レ芥^一」〈葛洪〉、「選^二工書者^一為^二書手^一」〈行義補〉、「宋、
初每歲諸臣皆賜^二時服^一」〈上同〉、「必使^二失主^一先^ニ具^二其所^一失之物^一」〈上同〉、「輪番請召^二学
生^一」〈二程全書〉、「入^ニ於人中^一」〈左伝〉、「再三言^二羯從^レ之^一」〈上同〉、「生^ハ好物也死惡物也」
〈上同〉、「遂如^二故知^一」〈上同〉、「不罪^二火主^一」〈通〉、「魯秀擊^二退鼓^一」〈上同〉、「求^二天
下珍物^一」〈六韜〉、「如^レ覆^二手背^一」〈吳越春秋〉、「暹、率^二当番衛士^一繕^二三宮城^一」〈唐書
杜暹伝〉、「^二采^一席」国夫人不^レ施^二脂彩^一素面朝^二帝^一」〈楊妃外伝〉。

▼下六六

東大寺のかもの屏風と申は、聖武帝の遺物^{かたみ}なり。南都の春田丹波といふ人の物語に、「こ
の屏風は天子行幸の時、道の左右にたてつけられたる物と申伝ふ。今残りたるもあまた
あり。かもの毛にて文字を織たるもの也。今は毛おほくはけ落て、文字さたかならず。其
中にて文字は字の明らかなるをうつして石摺の如くにこしらへたり」といふ。我、望て見
侍る。『千字文』の中の「孝当^{かうとう}竭力忠則^{ちよくちうそく}尽命^{じんめい}」の八字にてありし也。文字のさま正楷にて
古雅なる書也。扱此「かも」といふを我案するに、「鴨」にはあらさるへし。『万葉集』
に「毳」の字を「かも」とよみて、てにはの「かも」といふに用ひたり。凡鳥のつはさに
はあらで、腹下のこまかなる毛を「かも」といふと見えたり。この屏風はいつれの鳥にて
も黒くこまかなる毛にて地ををり、白くこまかなる毛にて文字を織れるなり。然れば、か
もの毛の屏風といふはあやまりなり。かもの屏風といふへきか。

▼下六七

硯箱を人に贈る者あり。その中にある墨筆をのこし置いて、硯箱斗を贈りけり。『譬語』
に「遺^{をく}人^に馬^を而^は解^{はつし}其^を羈^を、遺^を人^に車^を而^は脱^は其^を轡^を」《轡軔上環轡所貫》といへり。もろこ
しにてもかゝる事ありていへる也。おもき硯箱を贈るからはかるき筆墨はおしむにたらず。
墨筆を惜む心ならば、硯箱を贈らぬかよし。贈るからは墨筆を添ふへきことなるに、かく

の如きは利^{かたて}心の習のしみ付たるゆへなり。

▼下六八

「道ならび行はれて相^{(もとら)す}もらず」といへり。范文正公は「よき事ならば前後をかへりみず為へし」といへり。邵康節は「善事もおのれかちからをはかりてすへし」といへり。後人、是を評して、「文正公は天下の宰相なれば、この云、理にかなへり。康節は隱者の境界なれば、又、この云、理にかなへり」といへり。『左伝』の古語に「量力而動其遇^{すくなし}鮮矣」とも見えたり。士庶^{しもく}人、此心得もつとも有へき事也。

▼下六九

小児のいたつらに生る虫の類をころさんとする時、むこきことはせぬ物なといひてはきゝいれず。執心かとりつくといへは、やかてやむる也。中正^{ちうせい}の教は先の如し。功利の術^{しかた}は後の如し。中正は多くは迂^{まはり}濶^{とほき}なり。功利は捷徑^{はやみち}也。人はかしこたてなるそ物うき。迂濶なるそよき。迂濶と思へるは上下古今に通してかいなし。はやみちなるはかならず害を残す也。酒を買ふに、あしきもあれと、酒をかふはとかく酒家に求むる也。

是に付て昔聞し咄しの心にうかへり。軍中にて使番をつとむる人を用にて使に出ける時、人の教けるは、「定りの道を行は三里也。脇道より行は一里半也。わき道より行へし」。使番同心せず、三里の道を往還してことすみけり。後に人の此事を問しに、答けるは、「武功の人の云教けるには、「かゝる時、決して近道を行ぬものなり。近道は多くみちあしく故障ありて、思の外にひまとりたるなり。その時いひわけたらぬ物也。其上、後々近道のなき時、はなはたおそく見えて悪し」といへり。我、是をまもりて近道をゆかす」と也。是も亦中正と功利との差別なり。しかりとて、見えわたりたる場所にて本道は三町わき道は一町半也。いそぎの事ならはわき道を行もよし。こゝは権のたくひ也。是ともに本意をゆかんとせは愚といふへし。然れ共定法にはあらず。

▼下七〇

駿河台に池田八右衛門といひし劍術者の有けり。或時、門人の来りし時、「そこもと、宅を出給ふ時、門のけはなしをとちらの足にて先へこえ給ふや」ととひけり。此心は、門外は早公界也。往来の人多ければ、いかなることのあらんもしらす。心を用ひ、気をつけて、臆してひけをとるましき為の手段ならし。道を学ふ物も又しかり。心を用ゆる品には、少々かはりあるへけれど、見ず聞さるに戒謹^{つゝしん}恐慎^{おそれ}するは同し心つかひ也。今時の学者の露しらぬ事なり。

▼下七一

至人^{しじん}に夢なしといへり。真に夢なきにあらず。夢あれと覺^つと申しければ也。たとへは、常人、夜中に被内^{よま}にて思ひはかりし事、其時々みなく尤なる事に思ふ也。夜明て思ひ出れば、多くはうろんなる事也。是、偃臥^{あんぐは}すればねいるにあらされ共、心おほはるゝ所ありて明かならざる也。熟睡^{しゆくすい}すれば、いよくくらし。『説文』に「夢は不明也」と注す。睡中、心に見ることはくらし故、古人、夢と名つけたると覺ゆ。至人は昼夜起臥をわかたず、心明かなるかゆへ、夢なしと也。『孟子』に、平旦の氣を賞せられたり。夜間のおほはれをとりて明の生ずる故也。

▼下七二

道はもと高卑^{たかひく}の別なし。学には上下の品有へし。我道しかり。仏法は本より苦空の道なれば、まいて高卑大小の品はあるましきに、大乘小乗と其説の分る事のうたかはしく思へるに、『四十二章経』『遺教経』をよみて仏の本意あきらかなり。

▼下七三

古のとつかの劍は、劍の身、二尺三四寸はかり成をいふなるへし。「つか」とは、人の指を四つならへたるなり。其たけ、大やう二寸四五分也。「矢つか」の「つか」と同じ。文字は「握」なり。このつかを十あはせて十つか也。古、いまた尺^{さし}なき時此握にてはかれる成へし。『日本記纂疏』に「劍の柄の長き十握あり。劍の身の長さは是にて推へし」とのたまへり。あやまれり。然らは、神代卷に「其状垂^{コトは}穎^{コトは}八握莫々然」とあり。是も又稲に柄ありて八握なるにや。禅閣程の博恰^{こふ}にてかゝる説をのたまへるはいかなる事にや。

▼下七四

ある小説に、東福寺の兆殿司、時の將軍義將公へ時々まねかれし。或時、「何にてもそのみあらは申へし」とありしに、「一夜一鉢の境界、何の望のあらん」と申せしに、とにかくのたまへは、「しからは申へし。東福寺の僧、好みて桜を植侍る。後世に至りて、精舎変して遊興の地となる侍^りるへし。ねかはくは、嚴命を下して寺中の桜を切捨させ給へ」といへり。尤なる事とて切しめられけりとなん。それよりこのかた、此寺に桜なし。ありかたき心はへなり。一説に、是は虎関なりともいふ。いまたいつれか是なる事をしらす。

▼下七五

定家卿の歌、「海上待月」を題にて、「あはし嶋秋なき花をかさしにて出るもおそい
さよひの月」とよみ給へり。歌の心は、いさよひなれば、月の東方より浪をかさしにて海
底より出るかおそしと也。淡路嶋は多く月の入をよめり。難波の浦より西にあたる山な
れはなり。此歌、難波の浦よりよめるにあらざるは勿論なり。然らは、淡路の東の海上よ
り東をみてよめる心なり。淡路の東にあたりては、紀の国、泉の国なれば、月は其山より
出て海よりあからず。こゝに至りて、種々の注ありて、いつれも通せず。この卿、つゐに
淡路の海辺に行たまふましかれば、おしはかりに淡路より東をみれば海つらより月出へし
と思ひてよめるならん。詩歌ともかゝる事の多き物也。定家卿の歌故、後人よみ損しは有
ましとおもひて説をつくるのみ。何人のいひけるか、歌人は居なから名所をしるといふも
あてにならずと。おかし。波を「秋なき花」といへるは、「草も木も色かはれとも、わた
つ海の浪の花こそ秋なかりけれ」といへる歌にて、かくいへるならん。されと、秋なき花
と詞を制して浪のこととするは、定家卿なればこそなり。他の人のいはんにはゆるすまし
きにこそ。

▼下七六

「二十」を「はたち」、「三十」を「みそち」、「四十」を「よそち」などいふ。「ち」の
字のことさたかならず。余おもへらく、「ち」はものをかそふることは也。唐土にては「箇」
の字なり。一より九迄をかそふるには、みな下に「ち」の字を付る也。「ち」「つ」はか
よふことはにて同じ心なり。皆「箇」の字にて、一箇、二箇、二十箇、三十箇なり。『堀
川百首』の歌に「三百六十」を「みつもゝちむそち」とよめり。「もゝち」といへるは百
箇也。「むそち」といへるは六十箇也。「三十一字」を「みそち一もし」といふ。「ち」の
字、心なし。「箇」の字にてかそふる意なり。「百」を「もゝち」といへは、「十」を「と
をち」とも云へし。未だ見及はず。是によれば、「百千鳥」も「百箇鳥」にて、百千の鳥
といふにはあらざるへし。箇の字、宋元已來の俗語にかならず用る字なるゆへ、雅語なら
ぬ様に覚え侍るに、宜僚か丸を弄する所に、「八箇は空中にあり。九箇は手にあり」と書
り。『大学』の「二箇臣」も一箇臣といふ説あり。ふるく用ひ来れり。

日本記饗宴の歌の中、聖徳太子をよめる歌の注に、憲法十七条のことを「とをち
あまりなゝをち」といへり。此注は鎌倉の中書王也と申伝ふる也。「千」を「ち
ゝ」といふも、「千千」にはあらて千箇なりと申。是によれば、「万」の「津」
も箇の字成へし。

▼下七七

何人のいひしか、定家卿は歌づくり、西行は歌よみとなり。よくいひかたとれり。定家卿は明の王李に類す。西行は唐の元白に類す。

▼下七八

世の習俗に、人に害あることの多き也。一事あけていは、人の隠居するといふことなり。昔聞さることなり。七十致^{かへす}仕とは品ことなり。今の世にて、其家の主人、五六十になれば、成長の子に世をわたす。しからされは、世間のおもはくもあしく、其子も面目なきに似たり。是、もと世事をつとむるをわつらはしく思ひ、安樂ならんを欲するより隠居する也。是より世事を打捨、万わかまゝになり、世のそしり、人のとかめをかへり見す、財宝をつひやし、わかなくきみにふける。是、親子不和の初なり。子たる物、みなく^{じゆんこう}純孝ならされは、たまく奉養にうすき事あれば、我老後のたのしみをいなむは不孝のいたりといふ。子はもとより父の御ことと同じからぬ上に、いろくの費用多し。是にては、ゆく／＼家業の衰とならん。家の為にすこし事をはふきたまふかよしとおもふ。是より、たかひに思ひつゝのりて、終に不慈の父と也、不孝の子となるなり。子の思ふ所は父思ひ、父の思ふ所は子おもは、よき程ならんかし。

▼下七九

「あらし吹みむろの山」の歌、或人の云、「みむろの下の河は龍田とは別なり。名所違へり」と難す。我思ふに、昔の歌人、後世の歌人の会にのそみ、題をとりて、居なから、みもせぬ山川を歌につくり出すか如くにあらず。名所のちかひはあるまし。もし龍田河は直にみむろ山の麓ならば、此うた、あまり無味なり。龍田河は一二里も外をなかるゝ河なるに、此紅葉のなかるゝは、みむろの紅葉のあらしに吹こしたるならんとならは一趣向なり。然らば「嵐吹」の五文字、ちからありて聞ゆ。此事、『古今集』の通にくはしくいへり。

▼下八〇

今の世、歌をかくたんさくは昔なかりし物と聞えたり。短冊と云事は我未た其故を聞侍らす。おして思ふに、元来は題を上にかき、いくらも重ね置、題の所をかくし、人々手にまかせ引とらせて歌よめるにや。『続日本記』天平二年「令採^{とく}短藉^{たんせき}を以仁義礼智信五字随^づ其字^じ而賜物」とあり。「採」の字を異本には「さくる」につくる。其後、此法をもて即席に歌よめるか。然らば、「短藉^{たんせき}」とも「採藉^{たんせき}」とも書へし。

又按するに『延喜式』式部寮の考選の処に、「丞、執^し研筥短冊筥置^し大臣前案^し」

とあり。是、短冊は選人の姓名をしるせる紙にて、今の短冊のかたの如し。此紙のかた、歌をかきて、よろしければ、このかたを用ひて、当座の歌をかきて、すくにたんさくといへるにや。

▼下八一

極西の国に長人国有。其人、手をはして星をにきると云。人、是を聞て、「天は至りて高く星はいたりて大なる物と聞及たり。いかなる長人なり共さはあるまし」といふ。「いや／＼、天はさのみ高からず。星も見えたる通りの物にて、さのみ大ならず。至りて長人ならば、手にとるましきにあらす」といひあらそふ。傍の人のいふ。「そこもと兩人とも、天にのほり星のそはにゆきて見給ふや」「さにはあらす。推量にて申也」「推量ならば、いか程あらそひても是非はつかぬ事なれば、この論はやめ給へ。但し、星を手になきるといふは兒童のいふ事にて、婦女子の信する所也。すこしも天文をしれる人のわらふ事也」。是につけて思ひ出たり。人の咄しに、仏説にありとて申けるは、帝釈と修羅王と戦の時、日月を手にてさへかくす。此時食すといへり。広大なる日月をかくす手はいかなる大さならん。いふかし。是、日月を下より見たる程の物とおもへるにや。又、日月は見えて帝釈阿修羅の形の見えさるもいふかし。『花嚴經』に「あしゆら王の身のたけ十六万八千由旬あり」といひて、此説に合せたり。然るに、日本などの曆者、此戦ひ、明年の何の月何の日何の刻にはしまるといふを算術にてしり、あまつさへその手にてかくす多少までをしるは、いかなる故にやといふかし。俗にいふ、「食は日月の病也。無養生なればかく病となると衆生に示し給ふ也」といふはおもしろしと、一笑々々。

▼下八二

あさ名は我国にていつれの時いつれの人にはしまりしや。菅相公、字は参。紀長谷雄、字は寛。文屋康秀、字は琳の類なり。唐土に物ならひに行し人の、帰て、「唐土の人は名の外に又名をつく」といふより、それを学ひてつけるならん。「あさ」は「あた」なり。「あた」は「他」なり。「外」也。名の外の名といふ事か。又「あさ」は「わさ」也。『日本紀』に「俳優」を「わさをき」といふ。たはむれをいふ。然れば、かりそめにたはれにつける名といふ心か。此心ならば、号に似たり。

▼下八三

推古天皇の御時、小野妹子を使として、唐土につかはさる。隋の煬帝の時也。『日本紀』にいはく、「妹子をもちしにてなつて蘇因高そいんかうといふ」と見えたり。是、「いも子」と

いへるを、唐土の人は「いんかう」と聞て、文字に「因高」とかけるなり。「蘇」の字いふかし。小野の切音かへしなるへきか。此例をとりて、紀のはせを、自ら「発昭はせう」の字を用ひたり。其後、藤原の清河、けんとうしにて唐にとまれしに、唐人は清河を河清といひあらたむとあり。清河といひては名のさまにあらぬ故か。又は言のひゝきのあしき故か。

▼下八四

日本の俗に触穢しよくゑの令あり。唐土にても天地郊祀まつりの時、凶服の物を入さる事、『礼記』に見えたり。今、京師堂上の間には、清次といふ事を専とする也。触穢の説、はなはたしく成て、清次出来たり。つるには潔癖きれいづきの病の如し。神事にあつかる事は、死喪しぞうのけかれはもちろんの事、其外清潔なるへき事也。清次と云詞は、大嘗会の悠記ゆき・須基すきと同じ。「悠記」は「清」也。「須基」は「次」也。精疎ていねいそ上下といはんか如し。京師の下々の婦女子、是を聞ならひて、平生日用の事に清次を云なり。是亦半は仏より来れり。かぼうちや国は天竺にちかき国にて、仏法を崇敬す。唐土の人、其国に至り、廁にてけかれを紙もてぬくふをみて、甚わらふとなり。其国の人は、貴賤ともに其度ことにゆあみすと也。是等は仏律より出たりと見えたり。

▼下八五

南蛮なんばんの国の中に頭飛鼻飲とうひびいんの国ありといふ。頭鼻は俗にいふろくく首の如し。是はうその事成へし。鼻飲は范成大はんせいでいか『桂林志』に「磁器の鉢はちの側にとく利りの口の如く成物あり。鉢に水を入れて其口を鼻にさし入て水をすふ。暑中には事の外すゝしくてよしとす」といひて一笑せり。

▼下八六

習俗しうぞくは勢より来る歟。つゐに人の心をうつしかゆる也。日本にては今産穢といふ事有。血をいむ故なり。唐土にては血をもて清浄のものとす。けかれたる物をけたものゝ血にて洗ふ事有。凡、人の血は、たとへは天地の間の湖水うしほの如し。大小便臭くさうりくさき腐くさとは別也。然れ共、今血を清浄の物とは我人おもはず。清浄の物にてもあるへけれど、先は夷風いふうに近し。夷狄いできの風に近しと思ふも、清浄の物と思ふも、ともに習俗なうはしなり。

▼下八七

『延喜式』主殿寮に「灯燭、油火し為レ灯、蠟火ろうのう為レ燭しよへ」とあり。古とても禁裏に蠟燭を用られたり。然るに、『源氏』にいへる「おほとなふら」は油火也。其外は松明と見えた

り。蠟燭は見えす。此頃より例の穢なといひ出たるにや。

▼下八八

後世の歌の撰集に古歌は多くはあらためてのせらる。其中に『新古今』に沙弥満誓かうたに「世の中を何にたとへん朝ほらけこき行船の跡のしら浪」、『万葉』には「朝ひらきこきいにし船の跡なきかこと」とあり。満誓か心は、多の船のみなにとまりたれば、ことの外にきやかにて、まして順風に成ぬとて、碇あけ帆をあげ、舵かちよ櫓ろよ人よと水よと、いひのゝしるさはかしき、真にとりみたしさま也。ことゝのほり、船とも出はらひたる跡の、引かへてさひしき、波もさはかす、人の声もなく、かのさはかしかりし船はいつち行けん、ひとつも残る物なし。世間、富貴利達を得えて時めき、門前車馬のたゆる事なきも、或は死し、或は罪ありて外へうつさるれば、昔のさまなき物となる、盛者必衰のことはりを感じてよめり。改られたる心なれば、舟のこき行まゝに跡に浪の立つゝくを見て、世の中にたとへたるかことし。満誓か心になはず。「朝ひらき」「朝ほらけ」ともに同じ心なれと、こゝは「ひらき」なるへし。「こきいにし」とつゝくに「ほらけ」はかなはず。すへて「朝ひらき」とあれば、下の句に必ひらき出る心をふくみてよめり。其上に『万葉集』に「朝ひらき」とはよめり。「朝ほらけ」とはよます。

▼下八九

古老の申けるは、「我国に宋元明の能書能画の筆跡のあるは、倭寇とて日本の不逞亡命わるものらうにんのともから多くあつまりて、明にわたり、東南の諸国を屠滅剽略せめつふしかすめとるす。其所の守令、れきゝの人々、多くころされ、東南の間大乱おこれり。此時に書画器物多く奪ひとりて帰りしか、今の世に残り伝はれるなり。その多は多くは（衍字）にせ物也」。

▼下九〇

鄭望か『膳夫録』に「鱠さしみは鯽魚ふなより先なるはなし。鰯・魴・鯛・鮓、是に次く」といへり。鯛はいかなる魚といふをいはね共、文体やはり今のたいに似たり。今のたいは赤鬚せきれう魚にて鯛にあらずといふも、物産家の説にて信しかたし。

▼下九一

津軽の北の海辺にうてつといふ村あり。この一村は蝦夷人のすみか也。其人、耳に環くはんあり。二重なるもあり。ゑひす国の風、多くかくの如し。『泊宅編』に「波斯国はしこくの婦人は耳をうかちて環をかくること二十余数なるあり」といへり。是、西南夷の俗也。然るに、

宋の呂希哲のいへるは、今儒者、婦人をいましめて、耳をうかたさらしむ。即、『莊子』を引て、古より耳を穿の風ありとて、今の儒者をそしり口なり。然れ共、人の体をそこなひてかさりをつく、古よりありとても多ひすの風なり。すへて唐土の風を日本の習俗よりみれば夷風多し。

▼下九二

すへて生類、人に遠き物は死骸をみつかにかくす也。人に近き生類は必しもしかず。是は、人あはれみてみ^⑤つみかくすによりて也。人は相たかひにうつみかくす。是、自然のことなり也。『礼記』に「葬は藏なり」。人の見るることなからんを欲する也。みたりに厚葬し、よき土地をつみやすは無益のことにて、只土中に深くうつみかくすを道とす。天竺には四葬とて、火葬・土葬・水葬・林葬の四あり。水葬とは川に流して魚の食物とし、林葬とは森林の中に捨置て鳥獸の食とする也。真に西戎の風也。

▼下九三

呉国の王の女に二十と名付るあり。是より南方の人、二十を念とす。北方の人は用ひす。七夕の乞巧^{きつこう}を六日にするは、北方の天子、七日に崩せるあり。故に北方の人、六日用ゆ。又南方の人は用ひすと『兼名書』に見えたり。

▼下九四

四書のかな抄を板行する世の風は篤実にしたはしく、『韓非子』『荀子^{しゆんし}』を板行する心はこのまじからず。

▼下九五

活物^{いきもの}は皆妙用有。一々は人の目にさえきらず。船中にてのりたる人、立て岸の樹木に手をかくれば則船なかれず。其木をたくれは川上へ舟行也。是、船板をわつかふまへたる迄にて曾て力をも入さるに、船、足をはなれず。妙といふへし。

▼下九六

高森昌允の歌とて、「願^{ねが}ははく老ぬる今の心にてはたち斗の身を得てし哉」。おもしろく詠せし也。凡人生二十迄は是非のわかちもなく、おもしろく樂しと思ふ事、唯夢中のことにして、しかも或は病の種となり、又は貧窮の基となるをしらす。老て後は諸事に練歴^{れんれき}して一事なすことにも功者つき、身心の為となる。されと、行未久しからず。又は身もす

くやかならねは、十分の一もなしかたし。もし此功者つきたる心にて、二十はかりの身ならは、さそおもしろく楽しからん。しかれども、是はならぬ事をいひのへたるにて、身の用はなさず。唯老て得るのかめとそなる。年のわかく行末ななき人、このうたをきいて、すこしにも後のおもんはかりあらは、大成益なるへし。されど、西鶴などつくれる小説に、若き時の放蕩、後來の千悔となることをあまた書り。世のわかき者も是をすきてよめども、只馬の耳に風の如し。是らは眼の前、鼻の先なること、知かたきにあらざるに、知ことあたはず。いはんや高妙の理をや。

▼下九七

ふるくいひ伝ふる語に「論語よみの論語しらす」といふ。此語、いつれの時いつれの人のいひはしめけん。『論語』よみたる人の心たて身のおこなひのあしきをそしれる也。『論語』は人の身心を修おさめたいしく正する教なれば、佗の書にていはすして、殊に『論語』にていふ。是、昔の人もよくしれる所にして真に尊ふへし。しかるに、後世身心修正しんくしうせいの為とせず、是をして文字をしる為とし、或は文字の古雅を賞し、或は道理せんさくのたよりとする迄なり。なけくへし。

▼下九八

「はやす」といふ語は賞美する心なり。「見はやす」「つみはやす」「とりはやす」「はやしたつる」など、みな同し。『万葉集』の鹿にかはりてよめる歌に「わかしゝはみなますはやし」とあり。鹿の肉は天子の御膳の御なますとなりて御賞美にあふと也。又、めてたき事賞美して、うたひつゝみの散樂さるがくするを、今の世の人、「はやし」といふは、用をもちて体の言葉とする也。唐土の文にも「鼓うも之、舞ま之」とあるも、必しもつゝみ打、まふにあらず。誰誰はやしたつる心に用ひたり。

▼下九九

余、昔「狐妖論」一篇を作りしを、或人のみて笑ふ。云、「天下に理外の事多し。をのれかわつかなる知見に、合点のゆかぬを決然としてなき事とするは、真に井蛙の見と云へし。狐の妖をなすは唐土日本古今歴々ある事なるを、をのれひとり「なし」といふへけんや」。

われおもふに、天下理外の事なし。我知見の至らぬより理外の事ありと思へり。我知のたらぬをしらすして、俄に理外の事ありとするは、ちか頃饒忽の至りなり。是、わつかなる知見を至れりとして、天下の事を理内・理外と分ち出すなり。是則井蛙の見成へし。狐

は『易』『詩』に出て、いにしへようくはいの説なし。古注も誰よくうたかふ物とのみいへり。司馬晋此かた妖の説おこり、朱子も世の人の語につれて、「狐は媚獸」とのたまへり。此けた物は、外の獸よりさとき性あり。故にかたかふ事も余の獸より甚し。火を灯し、石を打などのしわさはあり。人をばかす、人にとりつく、人にはけるなどはさらになき事也。

或婦人、産後血乱し、日を経て治しける、折から、床に牛の鈴のかけ物あり。つく／＼打詠て、又乱心し、およそするわさ、みな牛なり。家内みな／＼おとろき、祈祷をたのみけるに、山伏のいへるは、「是は狐のつきたる也」といひしより、又狐のわさをなして、つゐに狐つきになしおほせけり。

是、初より牛は勿論、狐もしらぬことにて、この病人の心と世のならはしとより出来る也。其上、世上に人々のいふ狐はなし、十に八九は直に見及ひたるにあらすして、伝聞のみ。たま／＼実にあるは、また狐にあらすして、みつから作り出すなり。或は祈祷者又はまいす坊主のこしらへ出して、其料錢をむさほるなり。且人にかきやふりとそしらるとも、狐妖なしといふは、丈夫の氣象にてよし。一の小獸をおそれうやまひて、あらぬ空言を女わらへの如く信し、みつから愚にならんよりはまさらんか。

▼下 一〇〇

陳沂か『拘虚晤言』に「狐智不_レ過_二善疑_一、兎狡不_レ過_二三窟_一」といへり。古人も余に同しきありとよろこはし。『玄中記』といふ書に「狐、五十歳能變化為_二婦人_一、百歳為_二美女_一、千歳即与_レ天通」といへり。此書は晋の郭璞といふ算をきのあめる書にて、妄誕不經をかきあつめたり。ある僧のいひしは「狐の妖をなす事は、天竺にていはぬ事なり」といへり。是、元来陰陽師・祈祷者の云事成を今時れき／＼のものしりの信するは笑ふべき也。尤おかしきは、玉藻といふ女は狐にて、天竺にて斑足太子のつかの神、もろこしにては幽王の後褒姒也。後には殺生石となりたりと、その類を鼻も動さすかたりあふ也。かゝるうそはなしといふ事しれたることなるをしらす。いはんや高妙の理をや。昔、文徳帝の御前へ狐の出たりしに、御みつから弓矢とり給ひてゐころしたまひし事を『文徳実録』に書かせらる。後世の如く狐をおそれ給はし、射ころし給ふは扱置、官位をさつけ給ふか、又は『大般若経』転読し給へし。是、昔狐妖をいはぬ証拠成へし。

〔以上、卷之下〕